

## 両足院蔵『月令抄』翻刻・解説(上)

田 上 稔

今回、紹介を試みようとする資料は、建仁寺両足院蔵『月令抄』である。

本資料は、文化・学問の保持に両足院が果たした役割、さらには両足院と博士家清原家等との繋がり<sup>①</sup>に関する資料として利用できる可能性が高いので、翻字を付して紹介するものである。

本資料は二冊からなり、いずれも美濃判の和綴じで、それぞれ「□令抄 上」「月令抄 下」(上巻題簽一文字目部分は剥離欠損)との題簽があり、それぞれ第一丁目表には「月令抄字」「月令抄宙」との表題がある。それぞれ、さらに遊紙一丁があり、上巻墨付第二丁目表には「享祿四年壬 五月環翠軒宗尤抄之」とある。享祿四年は西暦では一五三一年、「環翠軒宗尤」は、いうまでも無く清原宣賢(一四七五〜一五五〇)の号である。ただし、本資料の筆は、木田章義・京都大学名誉教授のご教示によれば利峯東銳(？〜一六二七)である。

利峯東銳は、林宗二(一四九八〜一五八一)の孫にあたる。宗二は、龍山徳見(一二八四〜一三五八)に従って来

日した宋人林浄因の後裔・持平道太の子であり、その龍山徳見は、建仁寺三十五世、両足院開山となる。和漢の学問を広く学び、清原宣賢にも随従して、多くの抄物を残した。孫の利峯東鋭が両足院に住したため、宗二の作製・書写した抄物の多くが、両足院に現存する。

さて、本資料に戻る。上巻墨付第一丁表は「啓蒙通釈」の題を掲げて、その引用が始まる。さらに、「曆林問答」の題のもと、引用が第一丁裏まで続く。なお、後に述べるように、『啓蒙通釈』は、京都大学附属図書館清家文庫に蔵されており、『曆林問答集』は、清原宣賢と関係の深い吉田家関係の書物として知られている。

墨付第二丁表から、「礼記卷第五」「月令第六」の題を掲げて、本文が始まる。

まず、「月令ト名クルコトハ」と、『礼記』『月令』の説明が漢字カタカナ文で始まる。さらに、周公作説と呂不韋作説とを挙げ、周公の作ではなく呂不韋の作とすべきことを述べる。

この説の根拠として、第三丁表からは、「正云」として『礼記正義』からの引用を掲げる。

第八丁裏からは「孟春之月日在」と、月令本文の部分を見出しとして掲げて、「此二孟春ト云ハ」と、宣賢の抄した解説と思しき漢字カタカナ交じり文が続き、さらに「正云」と、『礼記正義』からの引用が続く。

以下、月令本文を見出しとして、漢字カタカナ交じりに『礼記正義』からの引用を付すという形式を基本として展開していく。ただし、漢字カタカナ交じり文が『礼記正義』の書き下しである場合や、漢字カタカナ交じり文を欠く場合、逆に『礼記正義』からの引用漢文部分を欠く場合もある。また、一字下げ体裁が上巻第四一丁表から現れるが、それ以後、必ずしもこの体裁で統一されている訳でもない、など、様々に不統一な面をもつ。

『礼記正義』引用文には、返り点や送り仮名が添えられていることを基本とする。また、墨傍訓、朱による書き込みも多数見られる。さらに、たとえば「具」字の右横に「其歟」（上第一五丁表）、「字落歟」（下第三四丁裏）、「本ノ

マ、」(下第四五丁表)のような、おそらく書写時になされたであろう添え書きが見られる箇所があり、これら、校訂意識をうかがわせる書き込みが、利峯東鏡によるものなのか、書写元の本にあったものなのかは、さらに考究を必要とする。さらに、虎関師鍊『聚分韻略』など、『礼記正義』以外を証として挙げる場合もあり、それら解釈典拠文献の詳細な調査も、今後の課題となるだろう。

下巻表題のある第一丁裏内側から、

ルホトニ大夫ノ妻ヲ命婦ト云 老疾ト八年ヨリテ歛衆氣トテ出仕セ

と透けて見えており、これは上巻第五一丁表一行目と二行目

ルホトニ大夫ノ妻ヲ命婦ト云 老疾ト八年ヨリテ歛衆氣トテ出仕セヌ者也

と一致している。同じ筆であることから、反故を再利用したものかと思われる。

なお、上巻末にも下巻末にも、奥書・識語の類いは見当たらない。

では、以下、本資料の漢字カタカナ交じり文部分について、まず、文法的側面から、特徴的と思われる表現を列挙する。

### ① 音便

#### (i) イ音便

イ音便は、次のように多く見られる。異なり語のみ用例を挙げる。

#### 【形容詞連体形】

「飛鳥ノワカイヲ云」(上38才)

「只ヨイ時分ノ雨也」(上 55オ)

「孟夏ヨリウスイ帷ヲメス也」(下 6オ)

「ワルイ時分ニフルハ苦雨也」(下 8オ)

「果実カ小イ時カラ」(下 17ウ)

「六月ハ雨シケイホトニ」(下 22オ)

「姦シイ事ヲ禁断ス」(下 31オ)

「此段テマキラハシイ所デコサリマスル」(38オ)

「京へ遠イ國ト近イ國トニ」(下 44オ)

【動詞連用形】

「上ニイタ、イテ出テ後ニ」(上 12ウ)

「律ヲ其上ニライテ」(上 17ウ)

「フサイテラクニ」(上 17ウ)

「土ヲツキヌイテ出ニ」(上 28ウ)

「骨ノヒカワイタルヲ云」(上 38ウ)

「山林ヲヤイテ」(上 49ウ)

「羽ニツイテハ又少ホトニ」(下 2オ)

「罪科ヲ行イソメ小罪ヲ定ル也」(下 7オ)

「土カウルヲイテ」(下 22オ)

「木枝ニツラヌイテヲイテ」(下34オ)

「五尺ノ壇ヲツイテ祭ヲ云」(下51オ)

このうち、形容詞連体形は、むしろ非音便形の方が多く使用されている。下巻から、異なり語のみを挙げる。

「焦トキハ味イ苦キ也」(下2ウ)

「絺ハ細ク裕ハ麤キ也」(下6オ)

「矢時トハヨキ時分ヲスコメハ」(下6オ)

「水ノ獸ニテ寒キ氣アリ」(下6ウ)

「アラキ風カ吹也」(下8ウ)

「新ニ成ル黍ニアラス旧キ黍也」(下6ウ)

「他時ハコキ味ヲモ調和スル」(下16ウ)

「虫ナレトモコワキ者ナルニ」(下19オ)

「狼ハ太遠キ処ニテ」(下19ウ)

「盛暑ニテ帛ヲ染ニ宜シキ也」(下20ウ)

「アツキ湯ナトノ如ク」(下23オ)

「水氣多キ故ナレハナリ」(下24オ)

「涼風ハス、シキ風也」(下30ウ)

「削ノ深キモノナリ」(下31ウ)

「羞ハメツラシキ食物ヲ云」(下34オ)

「體完トハキスナトナキヲ云」(下 36 才)

「十月ノ寒ノ甚キ時分」(下 39 才)

「器カヨワキホトニ」(下 43 才)

「膳ノ得カタキ者ヲ」(下 49 才)

「婦人ニハ貴キ親戚姉妹アリ」(下 60 才)

「清水ノ香ハシキヤウナルヲ」(下 60 才)

「コヽハ晩キヲ云也」(下 64 才)

「終ニ近キナリ」(下 67 才)

(ii) ウ音便

京都系抄物の特徴と言われるウ音便は、イ音便に比べると、それほど多くは見られない。やはり、異なり語のみ用例を挙げる。

【形容詞連用形】

「幼少ハヲサナウメ分別ナキ者也」(上 44 才)

「房内ノ事ヲツヨウ戒タリ」(上 48 才)

「心モカイナウナルホトニ」(下 34 才)

「カヤウノ者ヲモヨウメ切ヘシ」(下 48 才)

【四段動詞連用形】

「兎ヲ打オホウテトルアミ也」(上 55 才)

「國ニ引コウテ」(下6ウ)

「隣國ヘサカウタル処」(下8ウ)

「鷹ニアウテ深林ニニケカクル」(下24ウ)

「神ニツカウマツルヲ祝ト云」(下36オ)

「辛勞ヲ子キラウテ」(下57オ)

形容詞連用形には非音便形も少数ながら見られる。

「旧キヲヨクシルサレマシタ」(1ウ) 他四例

「其跡カ多クコサリマシタニ依テ」(4ウ)

「東方ニ日カアカク見ルト申マスル」(8ウ)

### (iii) 促音便

東国語的特徴と言われる促音便<sup>④</sup>も見られる。なお、本稿④に挙げる「ヨツテ」以外の用例のみを、ここには掲げる。

「拙鳥ニナツテ羽ヲホウソウトメ」(上43ウ)

「磔ハハツ、ケトヨメリ」(上59オ)

「犠牲ヲモツテ皇天上帝名山大川四方ノ神ニ」(下19ウ)

「足タツヘキヲハタツテ巖重ニ行ヲ云」(下35ウ)

「毛色ヲソロヘカヲハカツテスル事也」(下45オ)

### (iv) 撥音便

撥音便の用例は見当たらない。

ちなみに、打ち消しの助動詞は、漢字カタカナ交じり文の中では、すべて、「ヌ」形である。たとえば、

「不韋カ作セヌト云ヘキニアラス」(上3オ)

「戸ノ入ラヌ前ニ黍肉醴ヲ祭ル」(上24オ)

## ② 助詞

上方語特有といわれる助詞「イデ」が、本資料に見られる。

「内ニハタラカイト居ヘカラス」(下6ウ)

「五穀ヲモ取ライト冬ノタクハヘヲセヨ」(下38ウ)

「客人トメイト来タ去ラサル心也」(下42オ)

「不居トハハタラカイト井ラレサル也」(下49ウ)

格助詞「の」の用法のうち、準体法は見当たらない。

係助詞「ゾ」は、わずかに二例を見いだした。

「鮪カ時ノ美物テンアルラン」(上54ウ)

「鷹モカヤウノ祭り処ソアルラン」(下30ウ)

係助詞「コソ」は、わずかに一例のみ。

「九月ニコソ水始涸ニ八月ニ水始涸ト云ハ」(下39ウ)

## ③ オノマトペ

オノマトペが散見されることも、本資料の特徴と言えるだろう。ただし、数としては少ない。

「最少ホトニツント清メル方アリ」(下2オ)

「山ニ入テクルリくトマワリテ」(下21ウ)

「巖重ニスルヲ云ムサくトセサルヲ巖ト云」(下31ウ)

「ソトシタル事ニ具足ヲキル」(下58オ)

これらオノマトペは、寿岳童子(二九五二)にあるように、或る種の抄物の口頭語的性格を代表する特徴であるが、次のような表現も同様に話し言葉の要素であると思われる。

「天下ノ器物カチトモチカワヌ様ニ」(上48ウ)

「明堂ノ東面ノマン中ヲ云」(上53ウ)

「明ニメチトモソサウニスヘカラス」(上58ウ)

「橈トハマツスクナル枝ヲ」(下35ウ)

#### ④原因・理由表現

原因・理由表現は「ユヘニ」が二例である。

「十二月ノ長ナルユヘニ孟ト称ス」(上9オ)

「此月蠢動メ生スルユヘニ春ト号ス」(上9オ)

「故ニ」は、接続詞として多用されているものの、

「此ニハ耕者ト云故ニ庶人ノ事ヲ云」(上49オ)

「酒カ今熟ス故ニ朝廷ニテコノ酒ヲ飲テ礼楽ヲスルナリ」(下8オ)

「陰氣ニ感メ成ル者ハ死ス故ニ半ナリト云」(下15オ)

「命方相氏ト云故ニ亦ト云也」(下37オ)

「シタカワヌ者ヲハムチウツ故ニ朴ヲ」(下47ウ)  
のような、直前部が終止形か連体形か、俄には判別しがたい用例を除けば、接続助詞としては例がない。これらも、接続詞としてよいであろう。

次に、「ヨツテ」が四例見いだされる。「ヨリテ」は、見当たらない。

「大皞其神句芒ト云ニヨツテ也」(上30ウ)

「コワキ者ナルニヨツテ伐ノ字ヲ用フ」(下18ウ)

「本ニ云ニヨツテ生数ヲ挙タリ」(下27オ)

「寢廟ナルニヨツテ同姓ノ國ニ命メ」(下67ウ)

「ツ」を表記しないもの

「軍法ヲ教ニヨテ也」(下48オ)

また、漢字を用いたもの

「文耀鉤カクイヘルニ依テ也」(上30ウ)

もある。

原因・理由表現としては、「ホトニ」が、圧倒的多数を占める。以下は上巻からの挙例である。

「宮室ノ事ヲ定ムルホトニ定トモ云也」(上9オ)

「脾ハ尊ホトニ一祭ル腎ハ卑ホトニ再祭ル」(上24オ)

「參乗ヲ主ルホトニ參ノ字ヲ加タリ」(上34オ)

「饗應スルホトニ此ノマスル酒ヲ」(上34ウ)

「獸カ懷妊スルホトニコレヲヤフラシ」(上 37ウ)

「不備トシタルホトニ手足カナヘタ」(上 48オ)

「虫ヲ殺スホトニ此ヲ殺サシ為也」(上 49オ)

「獻羔祭韭ト云ホトニ此鮮ノ字ハ」(上 49ウ)

「命セラルホトニ大夫ノ妻ヲ命婦ト云」(上 51オ)

「十二月ニ配スルホトニ毎月カハラテハ」(上 52ウ)

「蚕ヲ祈ルホトニ黄衣ヲ先帝ニマイラスル也」(上 53ウ)

### ⑤ 文末表現

ほとんどの文末が「ナリ」「也」で統一されており、話し言葉的「ソ」「ニソ」は、例外的である。

「夏ノ正月ヲ用ルソト云ニ」(上 9オ)

「解ハ解脱メトラル方ソ」(上 17オ)

「入ル、ハワルキト云ソ」(上 38ウ)

「ナニト礼スルソト云ニ」(上 46ウ)

「發動メモレ出ソ」(上 54ウ)

「功アル者ヲ官ニモアケ賞ヲ行ソ」(下 31オ)

「手カセ足カセヲコシラウソ」(下 31オ)

「此文ハカリ孟秋ニ替ルソ」(下 33ウ)

「功アル者ヲ官ニモアケ賞ヲ行ソ」(下 31オ)

「殺ノ氣タルニヨテ刑罰ヲ行ソ」(下 35 ウ)

「諸侯制トハ家作ノヤウソ」(下 44 オ)

「周ハ建寅ヲ用ソ秦ハ孟冬ヲ用ソ」(下 53 オ)

「此ハナニトシタル替ソト云ニ」(下 53 ウ)

次に、本資料の漢字カタカナ交じり表現の中に、古典的な語句（活用）の多く見られることが指摘できる。

「宜キ五穀ヲウユルナリ」(上 37 オ)

「コレヲ膠漆糸ヲモテコシラユル也」(上 59 ウ)

「火氣ノキエウスルモノ也」(下 14 オ)

「其シテカ反テ映ヲウクル也」(下 36 オ)

「ヤカテ過去テイヌルホトニ」(下 42 オ)

「力ノ強弱ヲクラフル也」(下 57 ウ)

「サヤウノ事ヲモナシソト云付也」(上 45 オ)

「桑柘ヲナキリソト云付ハ」(上 56 ウ)

なお、濁点も見られるが、限定的である。

以上のように、本資料に記された漢字カタカナ交じり表現は、オノマトペや文末「ゾ」の使用など話し言葉の要素を含みつつも、形容詞連体形非音便形使用や文末「ナリ」の多用などに顕著なように、書き言葉的色彩が濃厚である。

このことは、本資料が「聞き書き」ではなく、清原宣賢による講義の「手控え」であったことを推測させる。本稿が以上に指摘したような特徴からすると、当代の話し言葉資料としては、固有の大きな価値をもつとは言い難い。

さて、本稿冒頭の課題に戻る。本資料は、清原宣賢の抄したものを利峯東鋭が書写したものであるというところになるが、その利峯東鋭の写した元本は、どういったものであったのか。それを推測する上で、京都大学附属図書館清家文庫に、関連するものを求めてみる。<sup>5)</sup>

京都大学附属図書館清家文庫には、『月禮抄』（請求記号「清家文庫貴1624ケ1」）。以下「清家文庫A本」と略称）と、『月令抄』（請求記号「164ケ2貴」）。以下「清家文庫B本」と略称）との二種の月令抄が収蔵されている。

清家文庫A本は、本資料と同じ美濃判の和綴じで、やはり上下二冊からなり、それぞれ、「月禮抄 共二冊」と墨書表題があり、遊紙一丁の後に本文が始まる。清家文庫B本も、美濃判の和綴じで、やはり上下二冊からなり、それぞれ「月令抄 上 全二〇」「月令抄 下 全二冊」との墨書が表にあり、遊紙一丁の後に、墨付第一丁目から本文が始まる。本資料、清家文庫A本、清家文庫B本の三本において、上下巻本文の切れ目が一致しない。

誌面の都合で、詳細な比較は次々稿以降に準備しており、以下には、冒頭部分のみを簡単に紹介しておく。

両足院本及び清家文庫二本の三本（以下「月令抄三本」）とも、冒頭に『啓蒙通釈』および『暦林問答集』からの引用を載せている。

『啓蒙通釈』は、京都大学附属図書館清家文庫にも蔵されており（『易学啓蒙通釈』請求記号「1624エ5貴」）、上巻は清原宣賢筆（一部は清原業賢筆）、下巻は筆写者未詳となっている。この清家文庫本『易学啓蒙通釈』と本資料を含む月令抄三本との当該部分を比較して、最も大きな異なりは、清家文庫本『易学啓蒙通釈』の本文には存在してい

るが本資料本文には欠落している部分があることである。以下は清家文庫本『易学啓蒙通釈』の当該部分である（傍線は本稿筆者）。

朱子曰天躅至圓周圍三百六十五度四分度之一繞地左旋常一日一周而過一度日麗天而少遲故日一日亦繞地一周而在天為不及一度積三百六十五日九百四十分日之二百三十五而與天會是一歲日行之數也月麗天而尤遲一日常不及天十三度十九分度之七積二十九日九百四十分日之四百九十九而與日會十二會得全日三百四十八餘分之積五千九百八十八如日法九百四十而得六千盡三百四十八通計得三百五十四日九百四十日之三百四十八是一歲月行之數也歲有十二月々々有三十日三百六十有一歲之常數也故日與天會而多五日二百三十五分者為氣盈月與日會而少五日五百九十二分者為朔虛合氣盈朔虛而閏生焉

若干の字句の異なりをもちつつも、右に傍線を付した部分を欠く、という点で、月令抄三本すべてが共通している。その欠落部分に「々」のような記号を記すことも、やはり、三本とも等しい。

次に、『曆林問答集』からの引用部分である。清原宣賢は吉田兼俱の三男として生まれ、清原家の養子となったが、その吉田（卜部）兼俱の手になったと考えられている『曆林問答集』が、現在、天理図書館吉田文庫に所蔵されている<sup>⑧</sup>。その天理図書館本から、本資料等三本が引用している部分を抜き出すと（傍線及び空白は本稿筆者）、

天最速進日一度退月最遲而十三度退皆雖同道同行不及天而所退行反似右行而全日遲非月疾又日月逆天非右行矣 又云牛宿十一月星紀之次天北端之極也天運降近南故牛降南端自冬至漸而升井宿四月實沉之次南端之極也天運升近北故井升北端自夏至漸而降亦南北升降之中為春秋 鎮成曰日月隨天而下降至南端之極謂左旋隨天而上升至北端之極謂右行以為南北升降為左右此說且為好

となっている。このうち、本資料等月令抄三本は、各々若干の字句の異同をもちつつも、右の一重実線部分から始ま

り、二重実線部分に飛んだのち、点線部分に戻るといふ基本骨格で一致している。

このように、冒頭部分だけからも、本資料等月令抄三本が深い関係にあることは容易に察せられる。いずれかが祖本といった単純な関係ではなさそうではあるが、まずは、次々稿以降に、本文の詳細な比較を試みる。そのことを通して、文化・学問の継承に両足院が果たした役割、さらには両足院と清原家等との繋がりが、その一端でも垣間見られるのではないかと期待している。

なお、本資料との出会いは、京都大学名誉教授・木田章義氏によって進められた両足院御文庫の調査に参加させて戴いたことによる。木田章義氏からは、多くの御助言を頂戴した。

#### 注

- (1) 両足院、清原宣賢、及びその両者の関係等については、川瀬一馬（二九四九）、岡嶋偉久子（二〇二二）、木田章義（二〇〇五）、木田章義（二〇一八）に詳細な解説がある。
- (2) 中国製注釈書への、清原宣賢の大きな依拠については、柳田征司（一九六八）などにも触れられている。
- (3) 金田弘（一九七九）。ただし、山下宏明（一九六二）などは否定的見解である。
- (4) 注3に同じ。

- (5) 『礼記』（請求記号「1-647.3 貴」）は、「鄭氏註」とある刊本で、「宣賢<sup>ソフカク</sup>外記環翠軒□」を含め、多くの墨筆書き込みがある。
- 『礼記抄』（請求番号「1-647.2 貴」）は、月令本文を見出しとして掲げ、漢字カタカナ交じり文で解釈を記した後、「正曰」と『礼記正義』等からの漢文引用を載せる形を基本としており、文末が「ナリ」を主とするなど、本資料に非常に近い。清原宣賢

自筆とされている資料でもあるが、巻一のみが蔵されており、残念ながら「月令」部分は無い。

(6) 清家文庫には、他に、清原宣賢自筆『易学啓蒙抄』二巻（請求記号「I-62」エ33貴）、宣賢自筆『易学啓蒙通釈口義』巻上ノ二（請求記号「I-62」エ14貴）。一柏講、月舟聞書。）が存在する。『易学啓蒙抄』は、見出しに断片的な本文を掲げ、注釈を付する形態をもつが、その見出しに掲げられている本文は、『易学啓蒙通釈』本文中、月令抄三本が共通して欠く部分を含んでいる。『易学啓蒙通釈口義』は下巻を欠いており、月令抄三本の引用する部分に対する記述が存在しない。

(7) 中村璋八（二九七九）による。中村璋八（二九七九）は、同書奥書にある「清公」は「宣賢の養父、宗賢か、その父、良宣ではないか」としている。清原家と吉田家との深い関係は、木田章義（二〇一八）に詳しい。

(8) 中村璋八（二九七八）参照。

#### 参考文献

- 大橋敦夫（二九八九）「抄物の語法―『抄物共通語』の存在について―」（上智大学国文学会編『国文学論集』二二二所収）
- 岡嶋偉久子（二〇二二）『林逸抄』（源氏物語古注集成第二三巻）
- 金田 弘（二九七九）「抄物」（林巨樹・池上秋彦編『国語史辞典』所収）
- 川瀬一馬（二九四九）「饅頭屋宗二に就いて」（『ヒブリア』第一輯所収）
- 木田章義（二〇一八）「講演 饅頭屋と博士家―文化を守るもの―」（『ヒブリア』第一四九号所収）
- 木田章義（二〇〇五）「両足院本「毛詩抄」とその背景」（『林宗二 林宗和自筆毛詩抄』所収）
- 壽岳章子（二九五二）「言語観察の対象としての抄物の一意義―擬声語と翻訳―」（『国語・国文』第二〇巻四号所収）
- 中村璋八（二九七八）「曆林問答集本文とその校訂」（駒澤大学外国語部研究紀要『第七巻所収』）
- 中村璋八（二九七九）「曆林問答集の鈔本と引用文献」（渡辺三男博士古稀記念「日語文交渉史論叢」所収）

平沢 啓（一九八三・一九八四）「漢籍国字解の言語―その共通語的性格」（上智大学国文学会編『国文学論集』一六・一七所収）  
森岡健二（一九九一）森岡健二編『近代語の成立』文体編

柳田征司（一九六八）「清原宣賢自筆『三略秘抄』の本文の性格に就て」（『国語学』第七五号）

山下宏明（一九六一）「語り物文芸」（『國文學解釋と鑑賞』昭和三十六年二月号所収）

湯浅茂雄（一九九一）「雅俗対訳資料における俗語の共通語的性格」（森岡健二編『近代語の成立―文体編―』所収）

啓蒙通釈下 朱子曰天体至圓周圍三百六十五度四分度之一饒【一才】

地左旋常一日一周而過一度日麗天而少遲故日一日亦饒地一周而在

レ天為不及一度積三百六十五日九百四十分日之二百三十五而與天

會是一歲日行之數也月麗天而尤左遲一日常不及天十三度十

九分度之七積二十九日九百四十分日四百九十九而與日會々々

歲有十二月一々有三十日三百六十有一歲之常數之故日與天會

而多五日二百三十五分者為氣盈月與日會而少二五日五百九十

二分二者為朔虛一合氣盈朔虛而閏生焉

曆林問答云天最速進日一度退月最遲而十三度退皆雖同道

同行一不及天而所退行一反似右行一而全日遲非月疾一又日月逆天非右

行一矣 鎮成曰日月随天而下降至南端之極謂左旋随天而上【一ウ】

升至北端之極謂右行 為南北升降為左右此說且為好牛宿十一月皇紀之次天北端之極也天運降近南故牛降南端自冬至漸而升并宿四月實沉之次南端之極也天運升近北故升北端自夏至漸而降亦南北升降之中為春秋

礼記卷第五

享祿四年壬 五月環翠軒宗尤抄之【2才】

月令第六

月令ト名クルコトハ一歲十二月ノ其月々々ニ行フ政令ヲシルスカ故也

此月令ヲハ周公ノ作スルト云義ト又秦ノ代ニ呂不韋カ諸儒ヲ集テ十

二月ニ行フ事ヲ記録サセシカ十餘万言アリシヲ名ケテ呂氏春秋ト

云其篇首ニアルコトヲ后人カ抄出メシルスヲ此月令ト云ト云義ト二

義アリ蔡伯喈王肅ナトハ周公ノ作トイヘリ然レトモ周公ノ作ニハアラサ

ル歟其故ハ此書ノ中ニシルス官ノ名其外ノ事トモ多ク周ノ法ニカナ

ハス呂氏春秋ノ首章ニアルコトヲ后人カ刪テコノ月令トスルト云ヲヨシ

トスヘシ其明証多シ 呂氏春秋ノ篇首ニ皆月令アリ此文ト同シ

是一ノ証也 又周ノ時ニ大尉ノ官ナシ秦ノ時ニハ大尉ノ官アリ而ニ此【2ウ】

月令ニ〇為「來歲一援朔日」ト云コトヲ九月シルセリ是九月ヲ歲ノ終トシ

十月ヲ歲首トスコノ時周ノ法ニカナハス三ノ証也 又周ニハ六冕トテ六ノ冠アリ

天ヲ郊シ氣ヲ迎ル時ハ大裘冕ヲキ玉輅ノ車ニノリ大常日月ノ章<sup>旗也</sup>

ヲタツ而ニ此月令ニ服飾車旗ミナ其々ノ色ニヨル是事周ノ法ニカナハス  
四ノ証也然レハ周公ノ作ニアラス呂不韋カ春秋ノ篇首ヲシルスト云ヲ

本トスヘシ 此ニ不審アリ秦始皇十二年ニ呂不韋死ス十六年ニ秦カ

天下ヲ并テ其後十月ヲモテ歳首トス十月ヲ歳首トスルトキハ呂不

韋ハヤ死テ浮世ニイス然レハ不韋ハ十月ヲモテ正月トスヘカラス是

一ツ又秦天下ヲ一統メ部ヲ立□□此月令ニ諸侯ト云ヘカラス是二ツ【3才】

又秦ハ兵ヲ好テ天下ノ人ヲソコ□□リナンソ此月令ニ布德施惠春不興

兵ナト、云ヘキヤ然ラハ呂不韋ハ作セサル歟ト云義アリ鄭玄ハ不韋カ

作ト云ハ呂氏春秋ノ十二月ノ記録此月令ト同シカワリタルコトハ三五字ニ

スキス且呂不韋諸儒ノ作スル所ヲ集テ一代ノ大典トス秦カ其コトク

行ハサルマテ也秦カ月令ニシルス如クナキトテ不韋カ作セヌト云ヘキニアラス

又秦ハ水ノ位タリ秦文<sup>王</sup>●獲<sup>王</sup>黒龍<sup>王</sup>水ノ端トス十月ハ水位也未<sup>レ</sup>平天下<sup>ヲ</sup>前

ニ以<sup>レ</sup>十月一歳首トスマシキニモアラス然ハ不韋カ死サル前ヨリ十月ヲ歳首

トスルコトアルマシ故ニ鄭ハ月令ヲ以テ不韋カ作トスル也

正云月令者包<sup>レ</sup>天地陰陽之事<sup>也</sup>然天地有<sup>レ</sup>上下之形<sup>也</sup>陰陽有<sup>レ</sup>生成之

理<sup>也</sup>日月有<sup>レ</sup>運行之度<sup>也</sup>星辰有<sup>レ</sup>次舍之常<sup>也</sup>今既贊<sup>レ</sup>其文不<sup>レ</sup>得

レ不<sup>レ</sup>略言<sup>レ</sup>其趣<sup>也</sup> 案老子云道生一々生二々生三々生万物【3ウ】

(京ノ)

易云易有<sub>二</sub>大極<sub>一</sub>是生<sub>二</sub>兩義<sub>一</sub>禮運云禮必本<sub>二</sub>於大<sub>一</sub>分為<sub>二</sub>天地<sub>一</sub>  
 易乾鑿度云大極者未<sub>レ</sub>見<sub>二</sub>其氣<sub>一</sub>大初者氣之始大始者形之  
 始大素者質之始此四者同論<sub>二</sub>天地之前及天地之始<sub>一</sub>老子曰道  
 生<sub>一</sub>道與<sub>二</sub>大易<sub>一</sub>自然虛無之氣无象不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>以形求<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>以類取<sub>一</sub>強  
 名曰道謂<sub>二</sub>之大易<sub>一</sub>也道生<sub>一</sub>者一則混元之氣與<sub>二</sub>大初大始大  
 素<sub>一</sub>同又與<sub>二</sub>易之大極禮運之大<sub>一</sub>其義不<sub>レ</sub>拜皆為<sub>二</sub>氣形之始<sub>一</sub>也  
 一生<sub>二</sub>者謂混元之氣分為<sub>二</sub>一々則天地也與<sub>二</sub>易之兩儀<sub>一</sub>又與<sub>二</sub>禮之  
 大一分而為<sub>二</sub>天地<sub>一</sub>同也二生<sub>三</sub>者謂<sub>三</sub>參之以<sub>レ</sub>人為<sub>三</sub>三才也三生<sub>二</sub>万  
 物者謂<sub>二</sub>天地人既定万物<sub>一</sub>備生<sub>二</sub>其間<sub>一</sub>分為<sub>二</sub>天地<sub>一</sub>說有<sub>二</sub>多象<sub>一</sub>形狀之殊  
 凡有<sub>二</sub>六等<sub>一</sub>一曰蓋天文見周髀如<sub>二</sub>蓋在<sub>レ</sub>上二曰渾天形如<sub>二</sub>彈丸<sub>一</sub>地在<sub>二</sub>其  
 中<sub>一</sub>天包<sub>二</sub>其外<sub>一</sub>猶如鷄卵白之繞<sub>レ</sub>黃揚雄桓譚張衡蔡邕陸績王  
 肅鄭玄之徒並所<sub>二</sub>依用<sub>一</sub>三曰宣夜旧說云殷代之制其形體事義  
 無<sub>レ</sub>所<sub>二</sub>出<sub>レ</sub>以言<sub>レ</sub>之四曰昕天昕讀<sub>レ</sub>為軒言<sub>二</sub>天北高南下若<sub>二</sub>車之軒<sub>一</sub>是  
 吳時姚信所說五曰穹天云穹隆在上虞氏所說不知其名也六曰  
 安天是晋時虞喜所論注<sub>二</sub>考靈耀<sub>一</sub>用<sub>二</sub>渾天之法<sub>一</sub>今禮記是鄭氏所<sub>レ</sub>注  
 當<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>鄭義<sub>一</sub>以<sub>二</sub>渾天<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>說案鄭注<sub>二</sub>考靈耀<sub>一</sub>云天者純陽清明無形  
 聖人則<sub>レ</sub>之制<sub>二</sub>璿璣玉衡<sub>一</sub>以度<sub>二</sub>其象<sub>一</sub>如<sub>二</sub>鄭此言<sub>一</sub>則天是大虛本無<sub>二</sub>形體<sub>一</sub>但  
 指<sub>二</sub>諸星運轉<sub>一</sub>以為<sub>レ</sub>天耳但諸星之轉從<sub>レ</sub>東而西必三百六十五日四分日之

星既左轉日則右行亦三百六十五日四分日之一至旧星之處即以一日之行而為一度

星既左轉日則右行亦三百六十五日四分日之一至旧星之處即以一日之行而為一度

一星復<sub>二</sub>旧處<sub>一</sub>○計<sub>二</sub>二十八宿一周天<sub>一</sub>凡三百六十五度四分度之一是天之一周

之數也天如<sub>二</sub>彈丸一圍圓三百六十五度四分度之一案考靈耀云二度二千九【4ウ】

百三十二里千四百六十一分里之三百四十八周天百七万二千里者是天圓

周之里數也以<sub>二</sub>圍三徑一言之則直徑<sub>一</sub>七万一千里ノ三分ノナリ此●十八宿周廻

直徑之數也然二十八宿之外上下東西各有二万五千里是為四遊之極謂<sub>二</sub>之

四表<sub>一</sub>拋<sub>二</sub>四表之内并是宿内<sub>一</sub>檢有三十八万七千里然則天之中央上下

正半之處則<sub>二</sub>十九万三千五百里地在<sub>一</sub>於中<sub>二</sub>是地去<sub>レ</sub>天之數也鄭注考靈

耀云地蓋厚三万里春分之時地正<sub>二</sub>當中<sub>一</sub>自<sub>レ</sub>此地漸之而下至<sub>二</sub>夏至之時

地下遊<sub>二</sub>万五千里地之上畔與<sub>三</sub>天中<sub>一</sub>平夏至之後地漸々向上至<sub>二</sub>秋分<sub>一</sub>地正<sub>二</sub>當

天之中央<sub>一</sub>自此地漸々而上至<sub>二</sub>冬至<sub>一</sub>上遊<sub>二</sub>万五千里地之下畔與<sub>三</sub>天中<sub>一</sub>平自<sub>二</sub>冬

至<sub>一</sub>地漸々而下此是地之外降於<sub>二</sub>三万里之中<sub>一</sub>但渾天之體雖繞於地々則

中央正平天則地高南下北極高於地三十六度南極下<sub>二</sub>於地<sub>一</sub>三十六度然【5才】

則北極之下三十六度常見不没南極之上三十六度常見不見南極

去<sub>二</sub>北極一百二十一度餘若逐曲計之則一百八十一度餘若以<sub>二</sub>南北中半<sub>一</sub>言

之謂<sub>二</sub>赤道去<sub>三</sub>南極<sub>一</sub>九十一度餘去<sub>二</sub>北極亦九十一度餘此是春秋分之

日道也赤道之北二十四度為<sub>二</sub>夏至之日道<sub>一</sub>去北極六十七度也赤道之南

二十四度為冬至之日道去南極亦六十七度地有升降星辰有四遊

又鄭注考靈耀云天旁行二四表之中一冬南夏北春西秋東皆薄二四表一而

止地亦升二降於天之中一冬至而下夏至而上二至上下蓋極地厚也地與二星辰一

俱有二四遊升降四遊者自立春地與星辰西遊春分西遊之極地雖二西一

極升降一正中從此漸々而東至春未復正自二立夏之後北遊夏至北

遊之極地則升降極下至夏季復正立秋之後東遊秋分東遊之極地【5ウ】

則升降正中至二秋季一復正立冬之後南遊冬至南遊之極地則升降極上

冬季復正此是地及星辰四遊之義也星辰亦隨地升降故鄭注考靈耀云

夏日道上與四表平不去東井十二度為三万里則是夏至之日上極万

五千里星辰下極万五千里故夏至之日下至東井三万里也日有九

道故考靈耀云万世不失二九道一謀鄭注引河圖帝覽嬉云黃道一

青道二出黃道東一赤道二出黃道南白道一出黃道西黑道二出黃

道北一日春東從青道二夏南從赤道一秋西從白道冬北從黑道二立春

星辰西遊日則東遊春分星辰西遊之極日東遊之極日與星辰相

去三万里夏則星辰北遊日則南遊夏至星辰北遊之極日南

遊之極日與二星辰一相去三万里以此推之秋冬故此可知計二夏至之日【6才】

夕在二井星一正當高高之上以其南遊之極故在高高之南万五千里所

以夏至有二尺五寸之景一也於時日又上極星辰下極故日下去東井三万

里也然鄭四遊之極元出<sub>二</sub>周髀之文但日與<sub>二</sub>星辰<sub>一</sub>四遊相反春分日在  
娄則娄星極西日體在娄星之東去<sub>レ</sub>娄三万里以度言<sub>レ</sub>之十二度  
也則日没之時去昏中之星近校十度其時日極於東去日中之星遠  
校十度若秋分日在角則角星極東日體在<sub>二</sub>角星之西去角三万  
里則日没之時去<sub>二</sub>昏中之星遠校十度且時日極於西去<sub>二</sub>日中之星<sub>一</sub>  
近校十度此皆曆乖違於數不合鄭無<sub>二</sub>指解<sub>一</sub>其事有疑但福是鄭学  
政具言之耳賢者裁焉但二十八宿從東而左行日從西而右行一度逆  
沿二十八宿案漢書律曆志云冬至之時日在牽牛初度春分之時  
日在娄四度夏至之時日在東井三十一度秋分之時日在角十度  
若日在東井則極長八尺之表尺五寸之景若春分在娄秋分在角  
晝夜等八尺口之表七尺五寸之景冬至日在斗則晝夜短八尺之  
表一丈三尺之景一丈三尺之中去<sub>二</sub>其一尺五寸<sub>一</sub>則餘有一丈一尺五寸之景  
是冬夏往來之景也凡於地千里而差一寸則夏至去冬至體漸南漸  
下相去一十万五千里又考靈耀云正月假上八万里假下一十万四千里所  
以有<sub>二</sub>假下<sub>一</sub>者鄭注考靈耀之意以天去<sub>レ</sub>地十二万三千里正月雨水<sub>三</sub>  
之時日在上假於天八万里下至地一千一万三千里夏至之時日上  
極與天表平也後日漸向下故鄭注考靈耀云夏至日與<sub>レ</sub>表平冬至  
之時日下至於地八万里上至於天十一万三千里也委曲俱見考靈【7才】

耀注凡二十八宿及諸宿皆循<sub>レ</sub>天左行一日一夜一周天々々々之外更行二  
度計一年三百六十五周天四分之日月五星則右行日一日一度月

一日一十三度十九分度之七此相通之數也 今曆象之說則月一日至於四

日行最疾日行十四度餘自五日至八日行次疾日行十三度餘自九日

至十九日行則遲日行十二度餘自二十日二十三日又小疾日行十三度

餘自二十四日至於晦行又最疾日行一十四度餘此行十三度餘自一

十四日至於晦行又最度日行一十四度餘此是月行之大率也二十七日

月行一周天至二十九日強半月及<sub>二</sub>於日<sub>一</sub>與<sub>レ</sub>日相會乃為<sub>二</sub>一月<sub>一</sub>故考靈

耀云九百四十分為<sub>二</sub>一日二十九日與四百九十九分<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>一月是一月二十九日

之外至第三十分分至四百九十九分月及<sub>二</sub>於日<sub>一</sub>計<sub>二</sub>九百四十分<sub>一</sub>則四百【7ウ】

七十為<sub>レ</sub>半今四百九十九分是過半二十九分也但月是陰精日為<sub>二</sub>陽

精<sub>一</sub>故周髀云日猶<sub>レ</sub>火月猶<sub>レ</sub>水火則升光水則含景故月光生<sub>二</sub>於日所

照魄生於日所<sub>レ</sub>蔽當<sub>レ</sub>日則光盈就<sub>レ</sub>日則尽京房云月與星辰陰者

也有形無光日照<sub>レ</sub>之乃有<sub>レ</sub>光先師以為日似<sub>二</sub>彈丸<sub>一</sub>月似<sub>二</sub>讀體<sub>一</sub>以為月

亦似<sub>二</sub>彈丸<sub>一</sub>日照處則明不<sub>レ</sub>照處則闇 案律曆志云二十八宿之度

角一十二度亢九氏十五房五心五尾十八箕十一東方七十五度斗二十

六牛八女十二虛十危十七營室十六壁九北方九十八度奎十六婁十二

胃十四昴十一畢十六觜二參九西方八十度井三十三鬼四柳十五星七

張十八翼十八軫十七南方一百一十二度 丑為星紀初斗十二度終婺

女七度 子為玄枵初婺女八度終於危十五度亥為「嫫髻」初危十六【8才】

度終「於奎四度」戌為「降婁」初奎五度終「於胃六度」西為「大梁」初胃

七度終於畢十一度 申為「実沉」初畢十二度終「於井十五度末為「鶉

首」初井十六度終「於柳八度」午為「鶉火」初柳九度終於張十六度

巳為鶉尾初張十七度終於軫十一度 辰為壽星初軫十二度終

於氏四度卯為大火初氏五度終於尾九度寅為折木初尾十度終

斗牛十一度 五星者東方歲星南方采惑西方大白北方辰星中

央鎮星其行之遲速俱在律曆志不「更煩說」 春秋說題辭

云天之為「言顛也說文云天顛也劉退熙積名云天顛也又云坦也地底也

其体底下戴万物又云地諦也五土所生莫不「信諦」元命包云日之

為「言實也月闕也滿則缺也 說題辭云星精陽之采也陽精為「日【8ウ】

日分為「星故其字曰下生也積名云星散也布散於天又云陰也氣在

內與陰也陽精也陽氣在外發揚此等是天地陰陽日月之名也

祭法黃帝正名百物其名蓋黃帝而有也或後人更有增是天

高地下日盈月闕皆星度少井斗度多日月右行星辰左轉四

遊升降之差二儀運動之法非由「人事所作皆是造化自然先儒

因「其自然遂以「人事」為「義或挹」理是実或構」虛不經既無「正

文可<sup>レ</sup>憑今皆略而不録

孟春之月日在<sup>一</sup>此ニ孟春ト云ハ夏ノ正月建寅ノ月也今日本ノ正

月也呂不韋ハ秦ノ世ノ者ナルカナニトテ秦ノ正月建亥ノ月ヲ不<sup>レ</sup>用メ

夏ノ正月ヲ用ルソト云ニ今ノ正月カ天ノ正ヲ得テヨキニヨテコレヲ用ル也【9才】

殷周モ建<sup>周</sup>子建<sup>殷</sup>丑ヲモテ正朔トスレトモナヲ夏ノ正ヲ用ルコト多シサレハ

周ノ祭祀田獵ハ皆夏ノ正ヲ用イタリ秦モ十月ヲ正月トハスレトモ事ヲ

用コトハ夏ノ正ニヨレリ故ニコノ孟春ハ夏ノ正建寅ノ月ヲ用ル也

孟春ト云ハ孟ハ長也正月ハ十二月ノ長ナルユヘニ孟ト称ス春ハ蠢也

ハ動スルカタ也万物カ此月蠢動メ生スルユヘニ春ト号ス 日在营室トハ

營室ハ定ノ星也コノ星ヲ見テ方角ヲ正メ造作ヲスル程ニ室ヲ營

スルト云心ニ營室ト云又營室ノ事ヲ定<sup>テ</sup>ムルホトニ定トモ云也

日カ營室ノ宿ニアル也 正云案三統曆立春ニハ日在<sup>二</sup>危十六度<sup>一</sup>正

月ノ中ニハ日在<sup>二</sup>室十四度<sup>一</sup> 元嘉曆立春日「紙欠損」在危三度正

月ノ中ニ日在<sup>二</sup>室一度<sup>一</sup> 昏參中トハ孟春ニハ昏ノ時分ニ參星カ南ノ【9ウ】

正面ニミユルヲ中トスト云ナリ且尾中トハ孟春ニハ早旦ニ尾星カ南

ノ正面ニミユル也マツ昏ヲ云也後ニ旦ヲ云ハ星ハ昏ニ見テ旦ニ隠ル、

見ユル方ヲ本ニメマツ昏ヲ云也

正云案三統曆立春昏畢十度中去日八十九度正月中ニ昏并二度

中去<sub>レ</sub>日九十三度元嘉曆立春二昏昴九度中月半昏觜躄一度中

皆不<sub>レ</sub>昏參中者月令昏明中星皆大略而言不<sub>レ</sub>與曆正月上但有<sub>二</sub>

月之內<sub>一</sub>有<sub>二</sub>中者<sub>一</sub>即得<sub>レ</sub>戴<sub>レ</sub>之計<sub>二</sub>正月昏參中<sub>一</sub>依<sub>三</sub>統曆在立春之後六

日參星初度昏得中也但二十八宿其星體有<sub>二</sub>廣狹<sub>一</sub>相去遠近或月

節月中之日昏明之時前星以過<sub>二</sub>於牛<sub>一</sub>後星未<sub>レ</sub>至<sub>二</sub>正南<sub>一</sub>又星有

明暗見有<sub>二</sub>早晚<sub>一</sub>明者昏早見而且晚没暗者則昏晚見而且早<sub>【10才】</sub>

没所以昏明之星不可正依曆法但拏大略耳餘月昏明從此可知

注 孟長也 正云禮緯為庶長称<sub>レ</sub>孟故云孟長也若於人言之庶為孟

若於物言之直為長也不<sub>レ</sub>取<sub>二</sub>庶長之義先儒以<sub>三</sub>孟春亦為之庶長

案尚書康誥云孟候書傳天子之子十八称<sub>三</sub>孟候<sub>一</sub>並皆称孟豈亦

庶長乎先儒以孟春称庶長者非也 日月之行一歲十二會者日

行遲一月行二十九度半餘日行疾一月行天一匝三百六十五度四分度

之一過匝更行二十九度半餘逐及<sub>二</sub>於日<sub>一</sub>而與日會所會之処謂之

為辰鄭注周礼大師職云十一月辰在星紀十二月辰在玄枵正月辰

在娵訾二月辰在降娄三月辰在大梁四月辰在夷沉五月辰在鶉

首六月辰在鶉火七月辰在鶉尾八月辰在壽星九月辰在大火<sub>【10ウ】</sub>

十月辰在折木此是一歲十二會也 聖王因其會一 正日聖王因<sub>二</sub>

其日月自然之會一分為<sub>二</sub>十二分<sub>一</sub>以為<sub>二</sub>大略之數焉

所<sub>三</sub>以為<sub>二</sub>大略之數<sub>一</sub>者以<sub>三</sub>二十九日過半<sub>二</sub>月及於<sub>日</sub>日不可分<sub>二</sub>兩月<sub>一</sub>  
 各有<sub>三</sub>二十九日又兩月各有強半之日合兩半成<sub>レ</sub>一日是一月有<sub>三</sub>三十日<sub>一</sub>  
 一月二十九日<sub>二</sub>大一<sub>レ</sub>小之外仍有<sub>二</sub>餘分<sub>一</sub>一年十二月六六小檢有<sub>三</sub>  
 百五十四日是歲十二會之實數也仍少<sub>三</sub>十一日四分日之一<sub>一</sub>未得周天  
 聖王檢以<sub>三</sub>三百六十五日四分日之一<sub>一</sub>為<sub>二</sub>十二會之大數<sub>一</sub>會即一辰也  
 是一辰有<sub>三</sub>三十度十二辰檢有<sub>三</sub>三百六十度餘有<sub>二</sub>五度四分度之一<sub>一</sub>別  
 為<sub>三</sub>九十六分<sub>一</sub>檢五度有<sub>五九四十五</sub>二百八十分又四分<sub>五六三千</sub>度之一為<sub>二</sub>二十四分<sub>一</sub>并之為<sub>二</sub>  
 五百四十二<sub>一</sub>辰分之各得<sub>二</sub>四十二分<sub>一</sub>則是每辰有<sub>三</sub>三十度九十六分<sub>一</sub>【11才】  
 度之四十二計<sub>二</sub>之日月實行一會唯二十九分過半若通均一歲<sub>一</sub>  
 會數則無<sub>レ</sub>會<sub>每</sub>有<sub>三</sub>三十度九十六分之四十二<sub>一</sub>是以分之為大數也  
 此云<sub>二</sub>孟春<sub>一</sub>者日月<sub>レ</sub>正日<sub>レ</sub>誡此言是亥次之號立春之時日在<sub>二</sub>危十六  
 度<sub>正月中也</sub>月半雨水之時日在<sub>二</sub>營室十四度營室號<sub>一</sub>誡此言但星次西流日  
 行東轉東西相逆若月初之時則日在<sub>二</sub>星分之初<sub>一</sub>月半之時則在<sub>二</sub>  
 星分之半<sub>一</sub>月終之時在<sub>二</sub>星分之末<sub>一</sub>凡十二月日之所在或<sub>二</sub>舉<sub>一</sub>二月初<sub>二</sub>或  
 舉<sub>二</sub>月末<sub>一</sub>皆<sub>レ</sub>拋其大略不<sub>レ</sub>細與曆數齊同<sub>上</sub>其昏明<sub>ニ</sub>中星<sub>スル</sub>亦皆如<sub>二</sub>此斗  
 循<sub>レ</sub>天而轉行建一月<sub>一</sub>辰夕三十度九十六分度之四十二正月建寅<sub>二</sub>  
 月建卯三月建辰四月建巳五月建午六月建未七月建申八月建酉  
 九月建戌十月建亥十一月建子十二月建丑也 其十二辰之名案<sub>二</sub>律【11ウ】<sub>一</sub>

曆志ニ云孳萌於子則子孳也又云紐牙於丑則丑紐也又云引達於

寅則寅引也又云冒莠於卯則卯也又云振美於辰則辰振也又云巳

盛於巳則巳也又云萼布於午則午也又云昧菱於未則未昧也又云申

堅於申則申堅也又云留孰於酉則酉留也又云畢入於戌則戌畢也

又云該闕於亥則亥該也 律曆志又云北伏也陽氣伏於下

於時為冬々終也万物終藏南任也陽氣任養万物於時為夏々

假也假大也西遷也陰氣還落万物於時為秋々者孳也物孳斂

也東者動也陽氣動物於時為春々蠢也物蠢生也

凡記昏明中星 正曰案書緯考靈靈耀云主春者鳥星昏中

可以種稷主夏者公星昏中可二以種一黍主秋者虛星昏中可以【12才】

種麥主冬者昂星昏則入山可三以斬二伐具械王者南面而坐視二

四星之中者一而知二民之緩急々則不賦力役故敬援民時是觀時候

授民事也

其日甲乙 十干ヲ五分テ四時ト土用トニ配スルニ孟春仲春季春

ニハ甲乙ヲアツルナリ春ハ木也故甲乙ニアタル也甲ハ物ヲウチカフリタルヤウナル

心ナリ万物未二出生一時ハ物ヲウチカフリタルヤウナルカ陽氣ヲ得テ出ル時ハ

万物皆字甲ヲ解テ出ツ故二甲ト云乙ハ注ニアル如ク軌ノ字ノ心也軌ハ

キシル也万物地中ヨリ出ル時抽軌チウァツメキシリ出ル也故ニ乙ト云

注乙之言一正云乙軋声相近故云乙之言軋也 日之行東從一<sup>春</sup>

正云星辰之次謂<sup>二</sup>之黃道<sup>一</sup> 春時星辰西遊黃道近西黃道之東【12ウ】

謂之青道<sup>一</sup> 日体不<sup>レ</sup>移依旧而行當青道之上故云東從青道<sup>一</sup>

月為之佐者以日月皆經<sup>レ</sup>天而行月亦從<sup>二</sup>青道<sup>一</sup> 陰佐<sup>二</sup>於陽<sup>一</sup>故云月為之

佐知月亦從<sup>二</sup>青道<sup>一</sup>者以緯<sup>レ</sup>云月行九道々々者並與<sup>レ</sup>日同而青道<sup>一</sup>

黃道東赤道<sup>一</sup> 黃道南白道<sup>一</sup> 黃道西黑道<sup>一</sup> 黃道北并<sup>二</sup>黃道<sup>一</sup>為

九道也並與日同也 時万物皆解孚<sup>一</sup> 孚甲ハ柿ノ核ナトノ生スルヲ

見ルニ核ヲ上ニイタ、イテ出テ後ニ核ハヲツル也孚ハ浮ノ心也上ニ浮テヲ

ツルヲ云 正云日能生<sup>二</sup>養万物々々皆抽軋而生因<sup>二</sup>其抽軋<sup>一</sup>以為<sup>二</sup>日功之

名<sup>一</sup>也 孚甲在前抽軋在後則應孟春為甲季春為乙今ノ三春

揔云<sup>二</sup>甲乙者孚甲抽軋相去不<sup>レ</sup>遠早生者即孟春孚甲而抽軋也

晚生者即季春孚甲而抽軋也 律曆志云出<sup>二</sup>甲於甲<sup>一</sup>則甲是孚【13才】

甲也又云奮軋於乙則乙<sup>軋也</sup>又云明炳於丙則丙炳也又云大戊於丁則丁

戊也又云豐茂於戊則戊茂也又云理被於巳則巳理也理<sup>レ</sup>謂正<sup>二</sup>紀綱<sup>一</sup>也又

云改更於庚則庚更也謂物改更也又云悉新於辛則辛新也又云懷

任於壬則壬任也又云陳揆於癸則癸揆也謂<sup>二</sup>物之陳列<sup>一</sup>可<sup>二</sup>揆度<sup>一</sup>也

乙不為月名一正云月既佐日同有<sup>二</sup>甲乙之功<sup>一</sup>今獨以甲乙為日名<sup>一</sup>不<sup>三</sup>以乙

為<sup>二</sup>月名<sup>一</sup>故云君統臣功君謂日也日統領月之功<sup>一</sup>猶若<sup>下</sup>君統<sup>二</sup>領臣之功以為<sup>中</sup>

已功<sup>上</sup> 俗本云君統臣功定本云君統功无臣字義俱通也

其帝大皞其神<sup>一</sup>上ノ孟春之月ト云ヨリ其日甲乙ト云マテハ天道ヲ明ス

此ヨリ以下鴻雁来ト云マテハ聖人ノ天ノ時ヲ挙ルコト万物ノ節候ヲ云也

正云蔡邕云法象ハ莫<sup>レ</sup>大<sup>ニ</sup>乎天地<sup>一</sup>變通莫<sup>レ</sup>大<sup>ニ</sup>乎四時<sup>一</sup>縣象著明莫<sup>レ</sup>大<sup>ニ</sup>乎<sup>【13ウ】</sup>

日月故先建<sup>レ</sup>春以奉<sup>レ</sup>天々々然後立帝々々然後言佐々々然後列<sup>二</sup>昆

蟲<sup>一</sup>之別<sup>二</sup>物有<sup>二</sup>形可<sup>レ</sup>見然後音声可聞故陳<sup>レ</sup>音有音然後清濁可聽

故言鍾律均声可以章故陳酸醴之属也群品以著<sup>二</sup>五行<sup>一</sup>為<sup>レ</sup>用<sup>二</sup>於人<sup>一</sup>

然後宗而祀之故陳五祀此以上者聖人記<sup>レ</sup>事之次也東風以下者效<sup>二</sup>初氣

之序<sup>一</sup>也云々 大皞トハ伏犧氏<sup>●</sup>云其トハ春ヲ指セリ春ヲツカサトル帝

ハ伏犧氏也句芒ハ少皞氏ノ子ニ重ト云人也春ヲツカサトル神ハ句芒也

正云自古以來木德之君其帝大皞也謂之皞者案異義古尚昼說

元氣廣大謂之皞天則皞之廣大之意以伏犧德能同<sup>レ</sup>文故称皞以<sup>レ</sup>?

東方生養元氣廣<sup>盛</sup>大西方收斂元氣便小故東方之帝謂之大皞西

方之帝謂之少皞 句芒者主木之官木初生之時句屈而芒<sup>【14オ】</sup>

角故云句芒言<sup>二</sup>大皞句芒者以此<sup>一</sup>一人生時木王主春立德立功及其

死後養祀之則祀此大皞句芒故言也此之言據死後享祭之時不<sup>レ</sup>論

生存之日故云其神句芒 句芒言其神則大皞亦神也大皞

言帝則句芒常云臣也至而相通 大皞在前句芒在後相去

縣遠非是一時大皞木王句芒有主<sup>木</sup>之功故取以相配也

注此蒼精之君一正云蒼是東方之色故下云駕蒼龍服蒼玉

此是蒼精之君也則東方當<sup>二</sup>木行之君<sup>一</sup>也 著德謂大皞立功

謂句芒也 大皞宓戲氏者以東立德則謂之大皞德能執<sup>二</sup>伏犧牲<sup>一</sup>謂

之伏犧即宓戲也律曆志云大皞作<sup>二</sup>罔罟<sup>一</sup>以田漁取犧牲故天下號曰庖

犧氏又帝王世紀云取犧牲以供庖廚食天下故号曰庖犧氏或作宓

戲氏者密字誤也當穴下著<sup>レ</sup>必是古之伏字案帝王世紀云大皞帝庖

犧氏風姓也母曰華胥遂人之世有大人之迹出於雷沢之中一華胥履

之生庖犧於成紀蛇身人首有<sup>二</sup>聖德<sup>一</sup>為<sup>二</sup>百王先<sup>一</sup>帝出於震未有所

因故位在東主春象<sup>二</sup>日之明<sup>一</sup>是以称<sup>二</sup>大皞<sup>一</sup>一号黃熊氏

少皞氏之一正曰案昭二十九年左傳蔡墨云少皞氏有四叔曰重曰

該曰脩曰熙重為句芒該為蓐收脩乃熙為玄冥顓頊氏有子曰

犁為祝融共子氏有子曰句龍為后土是重為句芒 若然案楚語

云重為南<sup>正</sup>西<sup>火</sup>司天犁為<sup>二</sup>大正<sup>一</sup>司<sup>レ</sup>地所<sup>三</sup>以又為<sup>二</sup>南正火正不同<sup>一</sup>者蓋重為

木正兼為南正司天犁為火正兼為北正故韋昭注國語云火當為北

重既顓頊時為南正案楚世家高辛氏誅重犁依帝繫顓頊高辛【15才】

各有一人為帝則重既事<sup>二</sup>顓頊<sup>一</sup>又事<sup>二</sup>高辛<sup>一</sup>鄭則依命曆序以顓頊傳

九世帝譽傳十世則重何得事顓頊又事高辛者師解重人号雖

子孫皆号曰重猶若<sub>下</sub>羿為堯時射官至夏后相之時猶有<sub>上</sub>羿也

自古以來紀君臣之號一案昭十七年左傳云顓頊以來不能紀遠乃紀<sub>二</sub>於

近<sub>一</sub>命以氏事服注云自<sub>二</sub>少皞以上天子之号以<sub>三</sub>具德<sub>其歟</sub>百官之号以其徵

自<sub>二</sub>顓頊<sub>一</sub>以來天子之号以<sub>三</sub>其地<sub>二</sub>百官之紀以其事則伏羲神農黃

帝少皞皆以德為号也高陽高辛唐虞皆以<sub>レ</sub>地為<sub>レ</sub>号雖以其地為号

兼有德号則帝譽顓頊堯舜是其德号

其蟲鱗 鱗虫三百六十アリ龍為<sub>三</sub>之長<sub>一</sub>ト云木ノ皮アルハ龍蛇ノ鱗アルカ如シ

故ニ鱗虫ヲ春ニ配スル也 注象一草木ノ孚甲ヲ解カントスルハ鱗ニ似【15ウ】

タリ故ニ鱗虫ヲ春ニトル也 其音角 宮商角徵羽ノ五音ヲ四

時ニアツル時ニ春ハ角ノ音ニアタル也單出曰声雜皆音春樂ヲ挙スル

時ハ角ノ音ヲ本トス 注謂樂器一他ノ物ノ声ノ事ニハアラス樂器

ニウツス樂ノ声ノ事也ト云心也 正云角是扣木之声但作樂器之体象<sub>二</sub>

此扣木之声<sub>一</sub> 三三分羽<sub>益</sub>一 一五音ニ皆数アリ宮数ハ八十一商数ハ

七十二角ノ数ハ六十四徵ノ数ハ五十四羽数ハ四十八也コ、ニ三分羽益<sub>レ</sub>一以生

レ角ト云ハ羽数四十八ヲ三三分レハ十六ツ、三ツアリ其十六ヲ四十八ニ一ツツエハ

六十四也故ニ角数ハ六十四ナリ 正曰天地人謂<sub>三</sub>之三才<sub>二</sub>又陽数極於九<sub>一</sub>故

律曆志云五声之本生<sub>三</sub>黃鍾律之九寸<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>宮於<sub>レ</sub>管則九寸於<sub>レ</sub>弦則<sub>春</sub>

九々八十一絲也云々律曆志云商之為言章也物成熟可<sub>三</sub>章度<sub>一</sub>也角觸也【16才】

觸地而出戴芒角也宮中也居中央暢四方唱始施生為四声綱也微夏

祉也物盛大而蕃祉也羽聚也聚藏宇覆之也 属木者以正云木

清於土金之声濁於水火之声今角声亦清於宮商濁於徵羽故角声

之声属木所以清濁中凡数多者濁数少者清今宮数八十一商数

七十二徵数五十四羽数四十八角数六十四少於宮商多於徵羽故云清

濁中既尊者為濁卑者為清民則卑於君臣尊於事物亦是尊卑

之中故云民之象也 案樂記及律曆志云宮為君商為臣角為民

徵為事羽為物羽属北方其数少所以黄鍾在子其数多者冬時

凝寒之氣在於地上水又清輕羽既稟其寒氣又象水声故其

数少冬至陽氣伏於地下温積土中黄鍾含藏陽氣又象土声故

其数多各自為義不相須也 樂記云角乱正云證明角主於【16ウ】

人民子凡聲正云宮主土土声濁其数多八十一故主君商主金

々声稍重其数稍多故為臣角主木々声清濁中其声多少

中六十四故為民徵主火々声稍輕其数稍少五十四故為事々謂二人

之所營事務也 羽主水々声極輕其数最少四十八故為物也

物謂人之所用財物指其所營謂之事論其所用之体謂之物人是万

物之靈事物是人營作故卑於人也 大不過正云案國語景

王欲鑄無射伶州鳩諫云大不踰宮細不踰羽々即過也

律中大族 上ノ其日甲乙ト云ヨリ下ノ其祀戸ト云マテハ皆春三月  
 ノコトヲ云コ、ノ律中大族ト云ハタ々正月ヒトツキノ事ヲ云也律ハ十二律也  
 六律六呂ヲ共二十二律ト云律ハ陽呂ハ陰ナリ黃帝ノ伶倫氏ニ云付テ【17オ】  
 大夏ノ西崑崙山ノ竹ヲキラセラル取テ竹之解谷ニ断ニ兩節間ニ而吹之ト  
 アリ解ハ解脫メトナル方ソ谷ハ竹語ナリ竹ヨノ中ノウチホラナルヲ解谷  
 ト云処ノ名ニアラス無ニ谷節ニナト云時ハ谷モ節也此竹ノ兩節ノ間ヲ  
 取テコレヲ吹テ黃鍾ノ管トス十二管ヲ作テ鳳皇ノ音ニ象ル雄鳴  
 音ニ象テ六律ヲ作テ雌ノ鳴音ニ象テ六呂ヲ作也正月ノ○大族管  
 律カ  
 ニ應スルヲ中大族トハ云也應スルヤウヲハ注ニ見ヘタリ  
 注律候氣一律呂ニ就テ兩説アリ周礼ニハ陽律ヲハ竹ニテ管ヲ作  
 ル陰律ヲハ銅ニテ管ヲ作ルトイヘリ鄭康成ハ陽律ヲモ陰律ヲモ銅ニテ  
 作ルト云此説ヲヨシトス其故ハ律曆志ニ五量トテ龠合竹斗斛ノ五ノマス  
 ハ根本ハ黃鍾ノ龠ヨリヤコルト云其五ノ量ハ皆銅ヲ用スコレヲ以テ準【17ウ】  
 知スルニ律呂共ニ銅ヲ用テスルモノナリ司農カ陽律ヲハ竹ヲ以テス陰  
 律ヲハ銅ヲ以テスルト云ハ非也 孟春氣一應謂レ吹レ灰トハ地ニ室ヲ作  
 テ其中ニ一案ヲ置テ其月ノ律ヲ其上ニヲイテ葭ノ灰ヲ管ノ口ヘ入  
 テ羅穀ノウスキ、ヌヲ以テフサイテヲクニ其月ノ氣カ至トテ此灰ヲ吹  
 出メ羅穀ヲ動スモノ也コレヲ應スルト云也十二律ノ管ヲ地ニ埋コトハ

同室ノ内十二辰ノ位ヲタテ、其月々々ノ律ヲ其方々々ニウツムヘキナリ

正云以河内葭莩為灰宜陽金門山竹為管云々

吹灰動穀矣少動為氣和大動為君弱臣強專政之應不動穀為

君嚴猛之應大族者大族ハ林鍾ヨリ生シタリ大族ノ律ノ長

ヲ三二分テ今一ツソヘタルモノ也律長一正云黃鍾為諸律之首諸【18才】

律雖長短有差其罔皆以九分為限孟康云林鍾長六寸圍

六分則圍之大小逐管長短然則分寸之數不可定也故鄭皆為

圍九分也周語曰周景王ノ无射ヲ鑄ントセシ時伶州鳩カ對ヘシ

其辭也彼注云大族正声商故為金奏所以助陽出滯物也

正云陽管為律々法也言陽氣與陰氣為法鄭云律述也述氣之

管陰管為呂律曆志云呂助也言助陽宣氣又云呂拒也言陽相

承更迭而至云々律曆志云黃鍾黃者中之色君之服也鍾

者種也陽氣施種於黃泉孳萌万物為六氣元也周流六虛位

淮南子云呂者

旅也旅而反也

於子一在十二月一 大呂々旅也言陰氣大旅助黃鍾宣氣而牙物也

位於丑在於十二月大族々湊也言陽氣大湊而達物也位於寅【18ウ】

在正月夾鍾々種也夾助也言陰夾物大族宣四方之氣而出種物

也位於卯在二月姑洗々之言絜也言陽氣洗物姑絜之也位於辰

在三月 中呂言微陰始起未<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>著於其中<sub>一</sub>旅<sub>二</sub>助姑洗<sub>一</sub>宣<sub>レ</sub>氣齊<sub>レ</sub>物  
 也位於巳在四月 蕤賓<sub>ス</sub>蕤<sub>ハ</sub>繼也賓<sub>ハ</sub>道也言陽氣始道<sub>二</sub>陰氣<sub>一</sub>使<sub>レ</sub>繼  
 艮<sub>レ</sub>物也位於午在五月 林鍾<sub>ハ</sub>林<sub>ハ</sub>君也陰氣受任助<sub>二</sub>蕤賓<sub>一</sub>君主<sub>二</sub>  
 種物<sub>一</sub>使<sub>レ</sub>長大茂盛<sub>一</sub>也位<sub>レ</sub>於未<sub>一</sub>在六月 夷則<sub>々</sub>法也言陽止<sub>二</sub>法度<sub>一</sub>而  
 使<sub>二</sub>陰氣夷當<sub>一</sub>傷之物<sub>一</sub>位於申在七月 南呂<sub>々</sub>任也言陰氣助夷  
 則任<sub>二</sub>成万物<sub>一</sub>也位於酉在八月 無射<sub>々</sub>任也言陽氣究物而使<sub>二</sub>陰<sub>一</sub>  
 氣畢<sub>レ</sub>剝落<sub>レ</sub>之終而復始無<sub>レ</sub>厭已<sub>一</sub>也位於戌在九月 應鍾言陰氣  
 應<sub>二</sub>无射<sub>一</sub>該<sub>二</sub>藏<sub>ス</sub>万物<sub>一</sub>而雜陽閔種也位於亥在十月 十二律則有<sub>二</sub>上生下<sub>一</sub>【19才】  
 生同位異位長短分寸之別<sub>一</sub>故鄭注周礼大師職云其相生則以<sub>二</sub>陰  
 陽六体<sub>一</sub>為<sub>二</sub>黃鍾初九<sub>一</sub>也下<sub>二</sub>生林鍾之初六<sub>一</sub>林鍾又上生<sub>二</sub>大簇之九二<sub>一</sub>大簇  
 又下生<sub>二</sub>南呂之六二<sub>一</sub>南呂又上生<sub>二</sub>姑洗之九三<sub>一</sub>姑洗又下生<sub>二</sub>應鍾之  
 六三<sub>一</sub>應鍾又上生<sub>二</sub>蕤賓之九四<sub>一</sub>蕤賓又上生<sub>二</sub>大呂之六四<sub>一</sub>大呂又生<sub>二</sub>夷  
 則之九五<sub>一</sub>夷則又上生<sub>二</sub>夾鍾之六五<sub>一</sub>夾鍾又下生<sub>二</sub>无射之上九<sub>一</sub>无射又  
 上生<sub>二</sub>中呂之上六<sub>一</sub>同位者象<sub>二</sub>夫妻<sub>一</sub>異位者象<sub>二</sub>子母<sub>一</sub>所謂律取妻而  
 呂生<sub>レ</sub>子也 黃鍾長九寸其實<sub>一</sub>一<sub>レ</sub>輪下生者三分去<sub>一</sub>上生者三分  
 益<sub>一</sub>一五下六上乃一終矣 大呂長八寸二百四十三分寸之一百四  
 大簇長八寸 夾鍾長七寸二千一百八十七分寸之千七十五 姑洗  
 長七寸九分寸之一 中呂長六寸万九千六百八十三分寸之万二千九【19ウ】

百七十四蕤賓長六寸八十一分寸之二十六林鍾長六寸夷則長

五寸七百二十九分寸之四百五十一南呂長五寸三分寸之一無射

長四寸六千五百六十一分寸之六千五百二十四應鍾長四寸二十七

分之二十是也同位象夫妻者則黃鍾之初九下生林鍾之初六一同

是初位故為夫婦又是律取妻也異位為子母者謂林鍾上生

大簇林鍾是初位大簇是二位故云異位為子母又是呂生子也

云五下六上者謂林鍾夷則南呂无射應鍾皆被子午巳東之管

三分減一而下生之六上者謂大呂大簇夾鍾姑洗中呂蕤賓皆

被子午巳酉之管三分益一而上生之子午皆屬上生應云七上

而云六上者以黃鍾為諸律之首物莫之先似若無所稟生故不【20才】

レ數黃鍾一也其實十二律終於仲呂還反歸黃鍾生仲呂三分益一

大略得レ應黃鍾九寸之數也律曆志云黃鍾為天統林鍾為地統

大簇為人統故數整餘律則各有分數

其數八孟春ノ數ハ八也其數三ト云ヘキヲ成數ヲモテ八ト云也

注數者一正云生物者謂木火七八之數也成物者謂金水九

六之數也則春夏生物也秋冬成物也故易繫辭云精氣為物遊

魂為變也注云精氣謂七八遊魂謂九六一則是七八生物九六終物是也

正云謂之五行者案白虎通云行者言欲為天行氣也謂之水者白

虎通云水訓準是平均法則之称也言水在黃泉<sub>レ</sub>物平均有<sub>二</sub>準

則一也木觸也陽氣動躍觸<sub>レ</sub>地而出也火之為<sub>レ</sub>言化也陽氣用事万物【20ウ】  
變化也金訓禁也言秋時万物陰氣所<sub>二</sub>禁止<sub>一</sub>也土訓吐也言土居中稔

吐<sub>二</sub>万物<sub>一</sub>也 易曰天一地二易下繫ノ文也天ノ数二十五地ノ数三十天地  
ノ数ヲ合テ五十五コレヲ大桁ノ数ト云天數二十五ト八天一<sub>二</sub>天三天五天七

天九合テ二十五也地數三十トハ地二地四地六地八地十合テ三十也天ハ陽  
地ハ陰也陽數ハ奇也陰數ハ耦也陽ハ奇ナルユヘハ陽ハ氣ナリ氣ハ渾沌

然トメ一ナリ分別ノ象ナシ又陽ハ日タリ日ハ常ニ明ニメ虧盈ノ異ナシ

故ニ其數奇ナリ陰ハ耦ナルユヘハ陰ハ形ナリ形ニハ彼此ノ別アリ又陰ハ  
月タリ月ハ晦朔ノ別アリ故ニ其數耦也 五行自水始一<sub>二</sub>天生<sub>二</sub>水

於北<sub>二</sub>地<sub>二</sub>生<sub>二</sub>火於南<sub>二</sub>天<sub>三</sub>生<sub>二</sub>木於東<sub>二</sub>地<sub>四</sub>曰<sub>二</sub>生<sub>二</sub>金於西<sub>二</sub>天<sub>三</sub>生<sub>二</sub>土於中<sub>一</sub>  
コレ五行ノ生數ナリ水火木金土ト次タリ尚書洪範ニモ如此次テタリ【21オ】

天一ニ中央ノ土五ヲ加テ六トス地ニ中央ノ土五ヲ加テ七トス天三ニ中央ノ土  
五ヲ加テ八トス地四ニ中央ノ土五ヲ加テ九トス天五ニ中央ノ土五ヲ加テ十ト

スコレヲ成數ト云 正云尚書洪範云一曰水二曰火三曰木四曰金五曰土云々  
一曰水者乾貞於十一月子<sub>復卦</sub>十一月陽生故水數一也又天地ノ内水體最微

故水為始也 二曰火者坤貞於六月未<sub>遯</sub>六月兩陰生陰不敢當午  
火比於巖著見故次火也 三曰木者正月<sub>泰</sub>三陽生是建寅之月

故曰木々比火象有體質故次木也 四曰金者八月四陰生是  
建酉之月故四曰金々比木其體堅剛故次金也 五曰土者三

月五陽生三月建辰之月辰為土是四季之前土王四季故五曰土

載四行又廣大故次土也 水所以在北方者從盛陰之氣所以潤下 【21ウ】

者從陰也 火所以在南方者從盛陽之氣炎上者從陽也 木所以

在東者東是半陰半陽曲直以陰陽俱有體質尚柔故可曲可直也

金所以在西方者西方亦半陰半陽但物既成就體性堅剛雖可改

革猶須火柔之土所以在中者以其包載四行含稂万物為二万

物之主一稼穡者所三以稂二万物一也 木生數一正云鄭注之意水數

一成數六火數二成數七木數三成數八金數四成數九土數五成數十云々

舉其成數者金木水火以二成數一為功 皇氏用先儒之義以為金木

水火得土而成以水數一得土數五故六也火數二得土數五為二成數七一木數

三得土數五為二成數八一又金數四得土數五為二成數九一此非一鄭義一今所不取載

其味酸一木ノ実ノ味ハ酸草木ノ生スル臭ハ糞シ正云通於鼻者 【22才】

謂之臭在口者謂之味臭則氣也所以木味酸者尚書孔傳云木实

之性然則木实酸凡草木所生其氣糞也 夏其味苦其臭焦

者尚書孔傳云焦之氣味火燒物焦々則味苦中央云其味甘其

臭香孔傳云甘味生於百穀味甘則氣香秋其味辛其臭腥

者孔傳云金之氣味言金臭之氣則腥在口則辛冬云其味鹹

其臭朽者孔傳云水鹵所生故味鹹又水受惡穢故有<sub>二</sub>朽腐

之氣<sub>一</sub> 其祀戶<sub>一</sub>注春陽氣<sub>一</sub>正云春陽氣出祀<sub>二</sub>

之於戶<sub>一</sub>者戶在<sub>レ</sub>內從外向<sub>レ</sub>內戶又在內故云內<sub>レ</sub>陽也戶<sub>レ</sub>是人之出入

戶則有<sub>レ</sub>神故祭法注七祀云小神居<sub>二</sub>人之間<sub>一</sub>司<sub>二</sub>察小過<sub>一</sub>作謹吉<sub>一</sub>

者爾此戶神則陽氣在戶內之神故云祀<sub>二</sub>之於戶內<sub>一</sub>內<sub>レ</sub>陽也由<sub>三</sub>【22ウ】

位在<sub>三</sub>戶內<sub>一</sub> 又秋其祀門注云秋陰氣出祀<sub>二</sub>之於門<sub>一</sub>者門在<sub>レ</sub>外從

<sub>レ</sub>內向<sub>レ</sub>外門又在<sub>レ</sub>外故云外<sub>レ</sub>陰也則門神陰氣之神是陰陽別氣

在<sub>三</sub>門戶<sub>一</sub>者與人作神也 祀之先祭<sub>一</sub>牛羊豕ノ脾也春ハ陽之五

藏ニ於テハ脾ニアタル脾ハ五藏ニ於テ尊キ処ナリ故ニ脾ヲモテ祭ル也

脾モ腎モアレトモマツ脾ヲモテ祭ル也 正云所以春位當脾者

牲立南首肺最在前而當<sub>レ</sub>夏也腎最在後而當<sub>レ</sub>冬也從<sub>レ</sub>冬

稍前而當<sub>レ</sub>春從<sub>レ</sub>腎稍前而當脾故春位當<sub>レ</sub>脾<sub>一</sub>稍却而當<sub>レ</sub>心<sub>一</sub>

故中央主<sub>レ</sub>心從<sub>レ</sub>心而稍却而當肝故秋位主<sub>レ</sub>肝此等直拋<sub>二</sub>牲之五

藏所<sub>一</sub>在<sub>レ</sub>而當<sub>二</sub>春夏秋冬之位<sub>一</sub>耳 若其五行所生主<sub>二</sub>五藏則不

然矣故異義云今文尚書政陽說肝木也心火也脾土也肺金也腎<sub>【23才】</sub>

水也右尚書說脾木也肺火也心土也肝金也腎水也 許慎謹案月

令春祭脾夏祭肺季夏祭心秋祭肝冬祭腎與尚書同

鄭駁之云月令祭四時之位及其五藏之上下次之耳冬位在後

而腎在下夏位在前而肺在上春位小前故祭先脾秋位小却故

祭先肝腎也脾也俱在<sup>二</sup>高<sup>一</sup>下<sup>一</sup>肺也心也肝也俱在<sup>三</sup>高上<sup>一</sup>祭者必<sup>三</sup>

故有<sup>二</sup>前後<sup>一</sup>焉不<sup>レ</sup>得同<sup>二</sup>五行之氣<sup>一</sup>今醫病之怯以肝為木心為火脾為

土肺為<sup>レ</sup>金腎為水則有<sup>レ</sup>瘳也若及其術不死為劇如<sup>三</sup>鄭此言<sup>二</sup>五行

所<sup>レ</sup>主則從今文尚書之說<sup>一</sup>不同許慎之義<sup>一</sup> 凡祭<sup>二</sup>五祀於廟<sup>一</sup>

五祀トハ祀ル処五ツ処アリ戸ト中雷ト竈ト門ト行トナリ戸ト中雷トヲ

祭コトハ廟室ノ中ニアリ竈ト門ト行トヲ祭ルコトハ廟門ノ外ニアリ祭五【23ウ】

祀於廟ト云ハ殿ノ祀ヲ云ナリ周二ハ七祀トテ七処ヲ祀ル上ノ五祀ニ司

命ト<sup>廡敷</sup>廡トヲ加フ司命ト廡トヲハトコニテ祀ト云処ヲ審ニセス定テ

竈門行ノ如ク司命ト廡トヲモ廟門ノ外ニテ祀ルヘシ但周二ハヲシナメテ

宮内ニテ祀ル其故ハ宮正ノ注云祭社稷七祀於宮中ト云リ用特性

トハ牛羊豕ヲ不用メ牛一匹ニテ祭ル也 有主有<sup>レ</sup>戸<sup>一</sup>席ヲ廟堂ノ奥ニ

シク祀戸<sup>一</sup>主位ヲ廟ノ戸内ノ西ニ構テ北面ニ主位ヲ、クナリ乃制脾<sup>一</sup>

牲ノ脾ト腎トヲ切テ俎豆ノ俎ノモリモノニメ主位ノ北ニヲク 又設盛<sup>一</sup>

盛トハ黍稷ヲ云俎ニスヘタル美物ヲ<sup>ハ</sup>主位ノ前ノ東ヨリニアリ黍稷ノ簋

ニモリタルハ主位ノ前ノ西ヨリニアリ祭黍稷<sup>一</sup>祝官トテハウリノ様ナ

モノカ簋ニモル黍稷ヲ祭り俎ニノスル脾ヲ祭り醴酒ヲ祭ル皆三度【24オ】

ツ、祭ル恭<sup>黍</sup>モ三度醴モ肉モ三度ナリ 脾一腎一祭肉三度ノ事ヲ云  
脾ハ尊ホトニ一祭ル腎ハ卑ホトニ再祭ル 既祭一更一初メ奥ニシ  
キシ筵ノ前ニ饌食ヲ設ク其時主人筵上ニ移ル主人戸ヲ出テ、迎  
尸々々テ筵ニ即テ坐ス 略一宗廟ノ祭ニハ尸入テ後ニ辺豆及黍稷  
醴ヲ祭ル戸ヲ祭ル時ニハ尸ノ入ラヌ前ニ黍肉醴ヲ祭ルコノチカイア  
ル程ニシカト如祭宗廟ノ儀トハ云ハスメ略ト云也今迎尸ハ坐メ饌  
食スヘキタメナリ 正云祭戸所<sup>三</sup>以先設<sup>二</sup>席於奥<sup>一</sup>乃設<sup>二</sup>饌筵<sup>一</sup>迎尸  
皆在奥者就<sup>レ</sup>尊之処也中間設<sup>レ</sup>主祭<sup>レ</sup>黍祭肉戸西者就<sup>レ</sup>尸処也

其餘五祀所祭說主皆就其処也

東風解凍一此ハ正月ノ時候ヲ記ス聖人ノ政ヲ制スルハ其時候ニシ【24ウ】<sup>氣</sup>

タカテ行フ其私ナキ処也天ノ變化ハ七日ツ、ニメカハル東風解凍ト云ヨリ

後五日メニ蟄虫初振蟄始振ト云ヨリ後五日メニ魚上氷々々々々ト

云ヨリ後五日ニ獺祭魚々々々ヨリ後ニ鴻雁来ルコレヨリ以後皆如此

コレヲ七十二候ト云正月ト七月トニハ時候ヲ記ニ五句アリ自餘ハ皆四

句ナリ時候多トキハ五句ニシ少トキハ四句ニス別ニ子細ハナキナリ

正云其<sup>冬夏至春秋分</sup>一至二分之日皆再記<sup>二</sup>於時候<sup>一</sup>者以<sup>二</sup>至<sup>ハ</sup>是陰陽之始終<sup>二分</sup>

是陰陽之交會是節之大者故再記之季春亦記時候者蠶之將

生故記其蠶候<sup>一</sup>也故季春鳴鳩拂其羽戴勝降于桑注蠶時生

之候是也凡記「時候」先言者則氣候在前後言者則氣候在後

東風解凍ハ立春ノ日ナリ春風ヲ得テ凍ノトクルヲ云蟄蟲始振ハ土中【25オ】

ニ蟄居スル虫カ陽氣ヲ得テ始テ振動メ土中ヲ出ントスルナリ二月ニ至

テ出ツソレニ對メ始振ト云魚上氷トハ魚カ巖寒ノ時ハ水底ニ伏

スルカ暖氣ヲ逐テ正月陽氣ヲ得テ魚カ水上ニ游スル也上氷ト云ハ氷

ノ上ヘ上ニハアカラス魚カ水上ヘ浮上ル時ニ上ニアル氷ニ魚ノセナカノツク

ヲ云也 獺祭魚トハ正月中雨水氣也雨水トハ雪散メ雨水トナル也

カハウソカ魚ヲ食ハントテ魚ヲトルカマツ一番ニトリタル魚ヲ岸ノ上ヘ

モチテアカリテハツヲ、タムクル也人ノサバトルヤウニマツ手向ヲ祭ト云

鴻雁来トハ南ヨリ北ヘ向テ中國ニ至ヲ云北ヘ皈ラントテマツ都ノ辺ヘ

来ル是皆七十二候ヲ云ハヲ三ニスレハ二十四氣也二十四氣ヲ三ニスレハ

七十二候也八風等モ皆是ヨリメ云ヘリ通卦驗ニハ鴻ヲ候ニ作ル【25ウ】

注夏小正―夏小正ハ大戴礼ノ篇ノ名也 正月啓蟄トハ蟄虫始振ト

云ストヲ云始振トキハ蟄居ノ戸ヲ啓ク也 魚陟―漢始亦―正云漢

之時立春為二月節 驚蟄為正月中氣 雨水為二月節 春分為

二月中氣至 前漢之末 以雨水為正月中驚蟄為二月節 故律

曆志云正月立春節 雨水 二月驚蟄 節 春分 中是前漢之

末 劉歆作三統曆 改驚蟄為二月節 鄭以旧曆正月啓蟄 啓即

驚也故云「漢末」亦以驚蟄為「正月中」但蟄蟲正月始驚二月大驚

故在後移「驚蟄」為二月節雨水為正月中凡二十四氣案三統

曆正月節立春雨水ハ中二月節驚蟄春分ハ中三月節穀雨

清明中四月節立夏小滿ハ中五月節芒種夏至ハ中六月節小【26才】

暑大暑ハ中七月節立秋處暑ハ中八月節白露秋分中九月

節ハ寒露霜降ハ中十月節立冬小雪ハ中十一月節大雪冬至ハ

中十二月節小寒大寒中案通卦驗及今曆以清明為三月節

穀雨為三月中餘皆與律曆志並同謂之雨水者言雪散為雨

水也謂之驚蟄者蟄蟲驚而走出謂之穀雨者言雨以生三百穀

謂之清明者謂物生清淨明潔謂之小滿者言物長於此小得盈

滿謂之芒種者言有芒之穀可稼種謂之小暑大暑者就極

熱中分為小大月初為小月半為大謂之處暑者謂暑既將退

伏而潛處謂之白露者陰氣漸重露濃色白謂之寒露言

露氣寒將欲凝結謂之小雪大雪者以霜雨凝結而雪十月猶【26ウ】

小十一月轉大謂之小寒大寒者十二月極寒之時相對為大小月

初寒為小月半寒為大凡二十四氣々有十五日有餘每氣中半之分

為四十八氣々有二十七日半有餘故鄭注周礼云有四十八節是一氣易

一節也凡二十四氣每三分之七十二氣々間五日有餘故一年有七十

二候一也云々

天子居<sup>リ</sup>青陽左<sup>カニ</sup>个一正云此已前明天時氣候早晚此明<sup>下</sup>天子每

時居<sup>レ</sup>及所乘車馬所<sup>レ</sup>建旌旗所<sup>レ</sup>服衣玉所<sup>レ</sup>食性穀及器物之属<sup>上</sup>

春陽左<sup>个</sup>トハ明堂ノ東面ノ北ヨリヲ云正月ニハ天子ノ此ニ并テ朔ヲ

聽ケル也鸞路ノ車ニ乘リ青ノ馬ヲカケ青キ旗ヲタテ青衣ヲキ青

玉ヲ、フルナリ御膳ニハ麥ト羊トヲ本ニソナフル也餘ノ美物モ多アラン【27才】

スレトモ本ニ用ル<sup>レ</sup>処ヲ云也其器ニハエリモノヲメ穴ヲホリトヲス様ニスルナリ

委ハ注ニ見ヘタリ 注皆所以一色ニ青ヲ用ハ時ニ順フ<sup>レ</sup>処也食ト

器トハ氣ニ順フ<sup>レ</sup>処也春陽在<sup>个</sup>一北偏トハ北ヨリ也正云此是明堂北偏

ナリ而云<sup>二</sup>大寢<sup>一</sup>者欲<sup>レ</sup>明<sup>二</sup>堂與<sup>三</sup>大廟大寢<sup>一</sup>制同上故兼明於<sup>二</sup>明堂<sup>一</sup>聽<sup>レ</sup>朔竟

次還<sup>二</sup>大寢<sup>一</sup>也然云東堂則知聽朔皆堂不於<sup>二</sup>五角之室中<sup>一</sup>也

鸞路有虞一明堂位云鸞車ハ有虞氏之路也ト云周ノ車ニハノラスメ

有虞氏ノ車ニノル也有鸞和一鸞モ和モ鈴也車ニ鈴ヲツクルコレカ車

ヲヤル拍子ニカナフテナル也飾之一青色ナルモノニテ飾ル也

春言鸞一春ノ処ニハ鸞路ト云夏ノ処ニハ朱輅ト云冬ノ処ニハ玄路ト云

秋ノ処ニハ白路ト云四季共ニ鸞路ナレトモ云カヘタルハ互見メシルス也【27ウ】

馬八尺一庾人職ニカクイヘリ 凡所服一冠飾トハ冕ノ旒<sup>ヒ</sup>及笄

ヲ云衡璜トハ佩ル所ノ玉ノ名也 正云韓詩外傳云佩玉上有<sup>二</sup>蔥

衡一下有「隻璜」一牙蟻珠以納「其間」則右之佩玉上以蔥為衡橫置  
 於上以「貫珠之繩」三條「懸於衡上」二垂之而下以「雙璜懸」於兩畔  
 繩之下端又以牙懸「於中繩」下端「使前後觸」璜以為「聲衡」之下璜之  
 上皆貫「蟻珠」故云蟻珠以納「其間」謂「納於衡璜之間」也 麥實一  
 正云鄭云黍秀舒散屬火麻實有「文理」屬金菽實孚甲堅合屬水  
 稷五穀之長屬土是五穀所配之方也 羊火畜也一正云案尚書  
 五行傳曰貌之不恭則有雞禍注雞畜之有「冠翼」者屬「貌」言之不從  
 則有「犬禍」注犬畜之以口吠守者屬言視之不明則有羊禍注羊「  
 畜之遠視者屬視」之不聰則有「豕禍」注豕畜之君閑衛而聽者  
 屬聽思之不睿則有「牛禍」注地厚德載物牛畜之任重者屬思  
 皇之不極則有「馬禍」注天行健馬之疾行者屬皇極是雞為  
 木畜羊為火畜牛為土畜犬為金畜豕為水畜但陰陽取「象多」塗  
 故牛為酉為雞不可一定也 時尚寒一正云羊是火畜而春時食  
 之明「其有」意食以安「性」也春時尚寒故食「火畜」以助之夏食菽  
 與「雞者」以氣尤熱水触剋火木心抑土故食「北方之穀」與東方之牲「  
 減」二其熱氣「亦以安性」秋食「麻與」犬者秋氣既涼又將「嚮」寒不「有  
 其害」故食當方之穀牲「也」冬食黍與稷者冬氣極寒故食火穀  
 以減寒々勝於熱故食當方之牲 器疏者一刻鏤メ文ヲホリテ 【28ウ】

通達メホリトヲス也万物ノ土ヲツキヌイテ出ニ象ル 凡此車―虞夏

ニハ日月星辰ノ十二章ノ服アリ周ニハ朝礼祀戎禮獵ニ車服各

異ナリ今此ニ云ハ周ノ礼ト同シカラス虞夏ト異ナリ故ニ殷時ノコト也云々

而有變トハ殷ノ礼ニモチトカハルコトアリ殷ニハ木路ニ乗ト云此ニハ鸞路ニ

乗ト云純ラ殷ヲ用サル也 周礼朝祀―周礼ニ朝ニハ皮弁服也

祀ニハ六弁服也戎ニハ弁服田獵ニハ冠弁服ナリ又周礼ニ朝ニハ天象

路ニ乗ル祀ニハ玉路ニ乗ル戎ニハ革路ニ乗ル獵ニハ 路ニ乗ル是弁

服各其事々ニカワル四時ニヨリテカハラサル也 又玉藻曰―天子龍

袞以祭トハ四時共ニ龍袞玄衣纁裳ナリ四季ノ色ニヨラス

玄端而朝日トハ玉藻ニハ如此云此ニハ朝日ハ玄端ニアラス青衣ヲキル【29オ】

ト云皮弁以日視朝トハ皮弁白衣ス四時ナカラ如此時ノ色ニヨ

ラス 與此皆―月令ニ云処ハ周ノ法ニアラス 正云龍與レ玉言レ蒼

者蒼亦青也遠望則蒼旂與衣云青者欲レ見一人功所レ為故以ニ近

色―言之

是月―以立春先―正云此一節論下立春天子迎ニ春氣ニ及行賞之

各依文解之  
事ト是月トハ是月ノ氣ヲ云是月ノ日ヲイワス其故ハ十二月ノ節氣

ニ早晚アリモシ節氣晚キトキハ節氣當月ノ内ニアリモシ節氣

早トキハ節氣前月ノ中ニアリ立春ノ節シリス十二月ニ在リトモ十二月ニ

立春ノ事ヲ行ヘキ也立春ヨリ前三日ニ大夫ノ官カ天子ニ申ス

大暉其神句芒ト云ニヨツテ也今鄭玄一人蒼帝靈威仰ト云ハ春【30ウ】

秋文耀鉤カクイヘルニ依テ也 正云礼器云饗ニ帝於郊ニ而風雨節

寒暑時是人帝何能使ニ風雨寒暑得レ時又詩尚書云上帝皆為

天之周礼司服云王祀昊天上帝一則服ニ大裘ニ而冕祀ニ五帝ニ亦如レ之

五帝若是人帝何得下與ニ天帝一因レ服故以為ニ靈威仰ニ上云ニ盛徳在レ木

者盛徳則靈威仰之盛徳也 王居明堂一王居明堂礼トハ

逸礼ノ篇ノ名也出ニ十五里ニ迎春ト云ハ周ト同シカラス故ニ蓋殷礼ニテ

アリケナト云周近郊一正云鄭注尚書君陳序云天子近郊五十里

今河南洛陽相去則然是也 賞一朝大寢一夫寢トハ路寢

ノ事也天子ニ三朝アリ一ニハ燕朝賓客ナトヲ燕スル処也コレハ路寢ニアリ

二ニハ治朝政道ヲ行フ処也此ハ寢門ノ外應門ノ内ニアリ公卿大夫ニ賞【31オ】

賜シ事ヲ治ル朝也故大寢門ノ外ニアリ三ニハ外相コレハ庫門ノ外

皋門ノ内ニアリ衆庶ヲ詢イ罪人ヲ聽斷スル処也

命相布徳一正云此一 因ニ上天子迎レ春反レ国命ニ三公ニ布レ教施レ惠之

事相トハ三公也布レ徳トハ善教ヲシキノフルヲ云和レ令トハ禁法ヲカハラカ

ニスルヲ云行レ慶トハ善事ヲスルモノヲハ美アケテナヲセヨト云也施惠トハ事

タラヌ者ヲメクムヲ云及兆民トハ万民マテニ及メカクスル也

注相謂―正云案公羊傳隱五年傳云三公者何天子之相也自レ俠

而東者周公主之自レ陝而西者召公主之一相處ニ乎内一是三公相ニ王

之事ニ也至ニ六國時一一人知レ事者特謂ニ之相一故史記稱穰侯範雎蔡

澤皆為ニ秦相一後又為ニ丞相一天子曰兆民トハ左傳閔元年晋ト偃【31ウ】

之辭也 慶賜遂行―下ヲメクマル、事力中ニト、コヲラス下マ

テトヨリ行ハレテ母有不當トハ功ナキ者ノ賞ニアツカル事ナシ賞セラルヘキ

者ヲ賞セラルヘ也 遂猶達ト注ス慶賜ノ通達メ周ク施行ハル、ヲ

云 注使當得―慶賜ヲ得ヘキ者カ得ル也得マシイ者カ得サル也

非人トハ无功无徳之徒也サヤウノ者ニハ賞セス

乃命大史―迎レ春ニテソレヨリ還テ行レ賞コト畢テ乃命大史ノ官ニ

命メ六典ヲ守リ八法ヲ奉ケ天文及ヒ日月星辰ノ行度ヲ司ラシム

正云天則左還一日一度一年三百六十五度四分度之一又至レ周二度一日

月五星並逆行天右行各有ニ多少一辰有ニ二十八宿一亦隨レ天左行大

史令ニ具属官在ニ其候処一宿離ニ宿離トハ大史ノ属官ヲ云離【32オ】

ハ儷ノ字ノ心也左傳ニ鳥獸猶不レ失レ儷ト云配偶ノ心也礼ニ儷皮ト

云ハ皮ニマイヲ云コレモ配偶ノ方也共ニ止宿配偶スル属官ヲ宿離

ト云属官カ候ヲミテチカヘサルヲ云 母失經紀トハ經紀トハ天文ノ

進退度数ヲ云ヨク考テ進ヘキヲハ進ト云退ヘキヲハ退ト云若其推歩

明ナラス筭曆所ヲ失トキハ遲疾ノ度ニヨラス進退其常ヲ失フ是ヲ失經紀ト云曆筭ニモ進退ニマヨウ処ニテ日月蝕ヲカンカヘカユル也

以初為常トハ初トハ旧ヨフ法トスル処ヲ云旧法ニシタカテ常ノ行トスル也  
注典六典―正云六典者則大宰云天官治典地官教典春官礼典

夏官政典秋官刑典冬官事典 八法者一曰官屬二曰官職三曰

官職四曰官常五曰官成六曰官法七曰官刑八曰官計【32ウ】

離讀―馮相氏―正云馮相保章中士二人 馮相者鄭注馮ハ乘也

相視也世登高臺以視天文之次序 保章者鄭注保守也世守天

文之變 雖俱掌天文其事不同 馮相氏主日月五星年氣節候

推步遲疾知所在之處 若今之司曆主其筭術也 保章者調

守天之文章謂天文違變度数失其恒次一妖孽所在吉凶所生

若今之天文家唯主變異也此其所掌別也 相與宿偶―大史ノ官

カ其屬官ノ馮相氏保章氏ト恒ニ天文ヲ候フ処ニ在テ相與ニ止宿

配偶メ天道ヲウカ、イミヘシ怠慢メ天ノ變異ヲモ知ラヌヤウニアルヘカ

ラストナリ

是月也天子乃以元日―正云此一節論下迎春既反春事已起當祈【33オ】

穀親耕燕勞之事 是月ハ孟春ヲ云元日トハ元ハ善也吉日ノ心也

元辰ハ吉辰也甲乙丙丁等十干ノ時ハ日ノ字ヲ用フ子丑寅卯等

十二支ノ時ハ辰ノ字ヲ用ル也 祈穀于上帝トハ當年ヲ豊年ニ  
 アラセテタマハレト祈ル也 注謂以上帝―正曰案郊特性云郊  
 之用レ辛鄭注凡為人君當齋戒自 又云郊之祭也迎ニ長日之至一  
 鄭注引易說云三王之郊一用夏正春分而日漸長故云レ迎ニ長日之至一  
 郊特性云郊不レ言レ祈穀此經言レ祈穀不レ言レ郊鄭以為ニ祭是一故此注  
 謂以上辛郊祭天也鄭既以ニ祭ニ為レ一恐人為疑故引春秋傳以明之  
 案襄七年左傳云孟獻子曰郊祀后稷以レ祈農事一也是故啓蟄而郊  
 郊而後耕彼祈ニ農事一者則此祈穀也彼云ニ郊而後耕一此是祈レ穀之【33ウ】  
 後即躬耕ニ帝籍一是祈穀與レ郊一也 上帝大微―正云春秋緯文  
 紫微宮為ニ大帝一 大微為ニ天帝中一 有ニ五帝座一 是即靈威仰赤熛怒白  
 招拒斗先紀含樞紐祈レ穀郊レ天之時各祭ニ所レ感之帝一 殷人則祭ニ斗先  
 紀一 周人則祭ニ靈威仰一 以ニ其不定一 故棫云ニ大微之帝一 若迎春之時前帝  
 後王皆祭靈威仰故前注云迎春祭ニ蒼帝靈威仰一 特指ニ一帝一也此  
 郊雖レ祈穀亦是報レ天故郊特性云郊之祭也大報天而主日也  
 乃擇元辰天子親―元辰トハ子丑寅卯ノ十二支ノ吉日ヲ云郊  
 ニハ辛ヲ用ヲ耕ス亥ヲ用フコ、ヲ元辰ト云 天子ノメサル、車ノ  
 上ニ親ヲ耕作ノ道具ヲ載ス耒ハスキノ柄ノマカリタル処也耜ハカ子ノ  
 処也コレヲ參保介ト御者トノアワイニヲクナリ保介ハ車右也天子ハ【34オ】

左ニ乗ル御者ハ中央ニ乗ル車右ハ右ニ乗リ參ト云ハ車右ト御者ト

ハ參乗ヲ主ルホトニ參ノ字ヲ加タリ保介ハヨロイキタル勇士也天子

ノ御用心ニノセラル、也帥三公九卿ヲ帥テ南郊ニ往テ白

耕田也帝籍トハ天神ノタメニ民ノ力ヲ借テ治ル田ヲ云

天子三推トハ正云按國語王耕一發班三レ之賈逵注班次也謂公

卿大夫一也三レ之下各三三其上二也平一發公三發卿九發大夫二十

七發天子三推公五推卿諸侯九推此是貴賤耕發相ニスル之數

不レ云レ土者土賤不ニ與耕一也故國語云庶人終ニ於千畝一又周礼甸師是

下土ナリ云下帥二其屬一而耕中耨上王藉上鄭注云庶人謂徒三百人

注元辰正云陰陽式法正月亥為天倉以其耕事故用天倉【34ウ】

之盧植蔡邕並云郊天ハ是陽故用日耕藉ハ是陰故用辰十二支元者善

也郊雖用日亦有辰但日為吉主耕之用辰亦有日但辰為主

皇氏云正月建寅日月會辰在レ亥故耕用亥也未知然否

置耒一耒耜ヲ天子ノ身近クヲカサルハ天子農業ヲ勸ルマテ也農

人ニアラス故ニトヲクオク也 人君之車一保猶一正云保即襁保

謂二小被一所三以衣覆二小兒

反執爵一耕帝藉ヨリ反ヲ云爵ハサカツキ也 曰勞酒トハ骨折トテ

饗應スルホトニ此ノマスル酒ヲ勞酒ト云也 正云國語耕後宰夫陳二饗

膳<sup>一</sup>大贊王々歆<sup>二</sup>太牢<sup>三</sup>云々饗礼在廟燕礼在寢此云<sup>レ</sup>執<sup>二</sup>爵于大寢<sup>一</sup>故知燕也【35才】

是月也天氣下降<sup>一</sup>正曰此一節論<sup>二</sup>少陽之月務其始生<sup>一</sup> 天氣トハ天

地ノ氣ヲ云コレ陰陽ノ氣也消息ノ卦ヲモテ見ニ一年中ニ或ハ升リ或

ハ升ル<sup>本ノマ</sup>聖人象ヲ作テ各分テ六爻トメ十二月ニ象ル十二月消息ノ卦ト云ハ

十一月子



復

十二月丑



臨

正月寅



泰

二月卯



大壯

三月辰



夬

四月巳



乾

五月午



姤

六月未



遯

七月申



否

八月



觀

九月戌



剝

十月亥



坤

陽氣ノ升ルコトハ十一月ヨリ始テ陽氣漸升陰氣漸下四月ニ至テ六陽

皆升テ六陰皆伏ス五月ヨリ始テ陰氣漸ク升陽氣漸伏十月ニ至テ六【35ウ】

陰悉ク升テ六陽悉ク伏ス然則天氣下降地氣上騰ハ五月ヨリ十月マ

テノ事也 地氣下降天氣上騰ハ十一月ヨリ四月マテノ事也今正月

天氣下降地氣上騰ト云ハ正月ハ泰卦也  乾下坤上ノ卦也乾ハ天

坤ハ地也今乾ノ天ハ坤ノ地ノ下ニアリ故ニ天氣ハ下陰ト云坤ノ地ハ乾

ノ天ノ上ニアリ故ニ地氣上騰ト云正月ハ泰ナリ泰ハ通也天地交通スル也

七月ハ否也否ハ塞也天地隔塞スル也 天地一陽氣ハ下リ陰氣ハ上

テ陰陽互ニ通スル程ニ此月天地モ和同シ草木モ萌動スル也七月否

ノ卦ノ如ク天ハ天トメ上ニアリ地ハ地トメ下ニアテ互ニ申シ通セスハ和同ニ

アラス 正曰十月云ニ地氣下降天氣上騰者以十月之時純陰用事

地牀凍寒氣逼物地又在<sub>レ</sub>下故云ニ下降ニ於時六陽從上退盡無<sub>レ</sub>復【36才】

用事天牀在上不<sub>レ</sub>近於物一似若<sub>三</sub>陽歸<sub>二</sub>於天一故云天氣上騰其

實十月天氣反<sub>二</sub>歸地下<sub>一</sub>若<sub>三</sub>審察<sub>二</sub>於此<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>足<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>疑<sub>レ</sub>而劉洽汜闕皇

侃之徒既不<sub>レ</sub>審知<sub>三</sub>其理<sub>二</sub>又不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>定其肯趣<sub>一</sub>

子通后切也又七庚也

注此陽氣 蒸ハムス也農書一正曰案漢書藝文志農書有九家

百一十四篇神農二十篇野老十七篇宰氏十七篇董安國十六

尹都尉十四趙氏五篇鄭所引農書勝之十八篇王氏六篇蔡癸一

篇鄭所引農書先師以為汜勝之書漢書注汜音汎成帝時為

侍郎使教田三輔 土上謂置概以候土王長冒概陳根朽

可拔而去之耕者急速開發其地也

王命布農事王群官二命メ農事ヲ分布メ檢知セシム命田【36ウ】

トハ田峻也田ヲツカサトルヲトナ也詩ニ田峻至善ト云其田峻也田峻ニ云

付テ東郊ニカリヤヲ作テ奉行サセラル皆修地ノ封疆ヲ修理セシム

經ハ徑路也術ハ遂ニ作ヘシ遂ハ田間ノミノ也是ヲ正サシム

注田謂舍東郊正云其耕作歲時之氣起於東方為始

故令田峻舍國之東郊以命其事其諸侯都邑各舍國之東郊

封疆正云封疆則九夫為井四井為邑各有封境界域部分職

掌也 術周礼術遂聲相近故疑術為遂學記云術有二序

義同於此 夫間遂入職文案匠人云廣二尺深二尺遂小溝

也步道曰徑遂人職云徑容牛馬 今尚書證命田峻舍東

郊之事 今尚書トハ尚書有古有今壁裏所得膠東庸生所傳【37才】

者謂之古文尚書晁錯所受伏生二十九篇夏侯歐陽所傳者謂

之今文尚書鄭據而引之

善相高乾ク地ニウエテ宜キモノアリ濕氣地ニウエテ宜キモノアリ此

ヲヨク見テソコニ宜キ五穀ヲウユルナリ 教道人ツテニ教ヘスメ自

ラ教ル也 田事―田地ノ事已ニ正メ先定準直也準直トハ封

疆徑遂ヲ云 正云準謂輕重平均一直謂繩墨得中也封疆有墨

限徑遂有濶狹皆先平均正直之 農乃不惑トハ農夫田事ヲ知

テ疑惑ナキ也 注夏小正―正云夏小正是大戴禮篇也農率

則田峻也均田則審端徑遂也

是月也命樂正―正云此一節論此春為四時之首當脩祀典及祭山【37ウ】

川之事―樂正ハ樂官也學ハ學舍也仲春ニ釋菜ト云コトアリ其前

ニ舞ヲ稽古サスル也 乃脩一年中ノ祭ノ事ヲシルス也

命祀山―山林川澤ノ祀ハテ、餘ノ月ニハ牲ニ皆牲ヲ用ウル也此月ニハ

牝ヲ用并ス春ハ獸カ懷妊スルホトニコレヲヤフラシタメナリ 正云若天地

定廟大祭之時雖非正月皆不用牝 禁止―正云此一節論

時氣之事―春カ木カ王メ盛徳カ在木ホトニ木ヲ伐コトヲ禁スル也

正云禁謂禁其欲伐止トハ謂止其已伐者此伐木在山中或有禁障

之處十月許人採取至正月之時禁令止息故王制云草木零落然

後入山林―詩魚麗傳云草木不折不操斧斤不入山林是也若國家隨

時所須以為材用者雖非冬月亦得取之故山虞有仲冬斬陽木仲夏【38才】

斬陰木又云邦工入山林而才林不禁是也其非是所禁之処春秋亦得

取之故周礼云春秋之斬木不入禁鄭注斬四野之木可若於正月皆

禁<sup>一</sup>之 母覆巢——此一節論礼法春ハ施主ノ時ナレハ鳥ノ巢

ヲヤフルヘカラス覆トハ巢ヲ取テスツレハマツカイサマニ打カヘスヲ云正云若其

天鳥之巢則覆之故哲族氏云掌<sup>レ</sup>覆<sup>二</sup>天鳥之巢<sup>一</sup>此月亦禁之

孩蟲トハ始テ生メ孩子ノヤウニヲサナキ虫也 胎天トハ胎ハ母ノ腹中ニ在テ

未タ出サルヲ云ハラコモリ也天ハ初テ飛鳥ノワカイヲ云胎天ハ鳥ニモ獸ニ

モカケテ見ヘキ歟 麋<sup>ヘイ</sup>ハ鹿<sup>カ</sup>ノ子也或ハ獸ノ椋名トモ云卵ハカイゴ也取<sup>二</sup>

麋卵<sup>一</sup>ハ四時共ニ禁スレトモ此月ヨリトリワケ禁スル也若薦獻ノ事ニ用イ

スメカナワヌ時ハ取ル也故ニ王制云非以卵庖人行<sup>二</sup>犢麋<sup>一</sup>是也【38ウ】

母聚——大勢ヲアツメテ無用ノ事ニツカフヘカラス 母置——城郭ヲハ冬治ル

也春ノ農時ヲ妨ケシタメ也 掩骼——骼ハ禽獸ノ骨ノヒカワイタルヲ云

齒トハ骨ニ肉ノツキテクサリタルヲ○此等ヲハ土ニ埋ムヘシ 正云蠟<sup>サノ子</sup>氏云掌<sup>レ</sup>除

レ魺云々<sup>レ</sup>骸言<sup>レ</sup>掩<sup>レ</sup>齒言<sup>レ</sup>埋<sup>レ</sup>互言耳

是月也不可——孟春ニハ軍ヲ起メ人ヲ伐ツヘカラス兵ヲアクレハ必天ノ

殃アリ 注春ハ物ヲ生スル氣アリ兵ハ人ヲ殺サント也時ノ氣ニ逆フ也

兵戎——兵モ戎モツワモノトヨメリ去ナカラ兵ハ大刀刀ヤリ長刀ヲ云兵器也

虎閔ノ聚分韻ニ兵ノ字ヲ器財門ニ入ヘキヲ氣形門ニ入ルハワルキト云フ

サレトモ是モ心アルヘシ此日ニ軍兵ヲ興スヘカラス但人ノ取カケンヲハ兵ヲ起メ

防クハ苦シカラス不可從我始トハコナタヨリ兵ヲ起メ人ヲセムヘカラスト也【39オ】

注為客一兵ヲ起メ人ヲ伐ツ者ヲ客ト云敵来ヲ禦ク者ヲ主人ト云客トメ  
人ヲ防ハ苦シカラスト也 母變天之一天之道地之理ト云ハ畢竟

陰陽ノ道理ヲ云正義ニ天ニ有陰陽之道地有剛柔之理ト云ヘトモ只陰陽

ノ事也陽ハ剛也陰ハ柔也陰陽ノ道ヲ改メ斷スツヘカラスト云義也正云易說

卦云立天之道曰陰與陽云々立地ノ道曰柔曰剛云々 母乱人一人

ニハ禮儀ノ綱紀アリコレヲ乱ルヘカラス說卦云立人之道曰仁與義 注仁之時一

春ハ仁ニトル也仁ヲ行ハン時ナルニ人ヲ伐ツヤウナル義事ヲ舉ヘカラス舉ルハ人之紀

ヲ乱ル也 正云天云道地云理人云紀互辭也

孟春行夏令一正云上既云母變天之道母絶地之理母乱人之紀今若

施之不失則三才相應以人與天地共相感動故也施令有失三才俱【39ウ】

云々 孟春ニ スキテ夏ノ令ヲ行トキハ雨水不<sub>レ</sub>時也雨ノフラン時ニ旱シ水

ノテンニカワク又雨ノフルマシキ時ニフリ水ノ出マシキ時ニイツル也

草木一草木カ早ク零落スル也 國一國ニヲチヲソルノコトテクル也

此ニ天地人ノ三ヲ云雨水不<sub>レ</sub>時ト云ハ天ノ道也草木蚤落ハ地ノ道也國時

有恐ハ人ノ紀也 正云論ニ天地及人ニ亦先後不建或先言<sub>レ</sub>天者則此

孟春行夏令雨水不<sub>レ</sub>時是也或先言民者則孟春行秋令其民

大疫是也或先言地者則孟春行冬令水潦為敗是也所以然者

為害重者則在先言<sub>レ</sub>之為<sub>レ</sub>害輕者後言之大略ニ於文ニ可<sub>三</sub>以<sub>レ</sub>意得<sub>二</sub>次第<sub>一</sub>

其輕重無義例一也 注曰之氣乘一正云此風雨不時者謂風

雨少不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>應<sub>レ</sub>時所<sub>二</sub>以一風雨不<sub>レ</sub>應<sub>レ</sub>時者以孟春建寅其宿直<sub>二</sub>箕星<sub>一</sub> 【40才】

々々好<sub>レ</sub>風孟春行<sub>二</sub>夏令<sub>一</sub>宣氣不足故風少已來乘之四月純陽用<sub>レ</sub>事

純陽來乘故雨少 四月於<sub>一</sub>陽生為<sub>レ</sub>息陰死為<sub>レ</sub>消十一月至<sub>レ</sub>四月

為<sub>レ</sub>息言万物得<sub>二</sub>陽氣<sub>一</sub>蕃息五月至<sub>二</sub>十月<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>消言万物得<sub>二</sub>陰氣<sub>一</sub>消

尽 凡孟月疾<sub>失</sub>令則三時孟月之氣乘之仲月失令則仲月之

氣乘之季月告令則季月之氣乘之所以然皆以<sub>三</sub>同為<sub>二</sub>孟仲季

氣<sub>一</sub>情相通如其不和則迭相乘鄭之所注例亦不同云々

注以火訛一正云已來乘<sub>レ</sub>寅巳為<sub>レ</sub>火故火乘也寅為<sub>二</sub>天漢之津火雖欲來

而畏<sub>レ</sub>水終竟不來但訛言道<sub>二</sub>火相恐動<sub>一</sub>之

行秋令一疫ハ疫病也 注正云七月建申陰氣始殺々氣乘<sub>レ</sub>寅故人多大

疫 焱<sub>ウ</sub>風一焱風トハ風ノクルリ<sub>一</sub>トメクリテ吹ヲ云羊角ト云モ 【40ウ】

是也暴雨ハアラクフル雨也 注正月宿一正云案鄭注洪範中央土

氣為風東方木氣為雨箕屬<sub>二</sub>東方木<sub>一</sub>木克土土為<sub>レ</sub>妃尚<sub>二</sub>妃之所<sub>レ</sub>好故箕

星好風也 西方金氣為陰剋<sub>二</sub>東方木<sub>一</sub>木為妃畢屬<sub>二</sub>西方<sub>一</sub>尚<sub>二</sub>妃之所好

故好雨也今申氣乘寅兩相衝破申來逆寅々為風々之被逆故為焱

風寅往破申々為雨々之被逆故為暴雨 案介雅扶搖謂之焱謂

風之回轉也

藜莠<sub>イ</sub>一藜莠ハクサ也蓬蒿ハヨモキ也

注生氣―正云惡物トハ所<sub>三</sub>以害<sub>三</sub>生氣<sub>二</sub>今生氣亂惡物乘之

行冬令―大水力出テ草木ヲ、シナカシ堤カキル、也 雪―春ナレ

トモツヨク寒メ雪霜カフル也 首―首種トハ稷ヲ云百穀ノ内ニ稷ヲ

マツユル也故ニ首種ト云首ハ先ノ心也百穀ノ先ニユル也不<sub>レ</sub>入<sub>ト</sub>ハ実カ入【41才】

ラスメ皮ハカリナルヲ云

仲春ノ月日在奎―二月ニ八月カ奎ノ宿ニアリ陳皓云奎宿在戌降娄

之次 昏―弧星ト建星トハ二十八宿ノ内ニアラス 正云案三統曆

云二月ノ節二日在奎五度 昏井二十二度中去 日九十七度旦斗五度

中春分日在<sub>二</sub>娄四度<sub>一</sub> 昏柳五度中去 日一百二度旦斗十六度中

案元嘉曆二月節二日在<sub>二</sub>壁一度<sub>一</sub> 昏井十度中 日實四度中 春分日在<sub>二</sub>

奎七度 昏東井三十度中 旦斗四度中 餘月昏旦中星皆<sub>二</sub>拳<sub>二</sub>二十

八宿 此昏云弧中 旦云建星中 獨非二十八宿 者以弧星近 井星 建

星近斗 井斗度数多 其星體廣不可<sub>三</sub>的指<sub>二</sub>昏旦之中<sub>一</sub> 故拳 弧建

定 其昏旦之中 也【41ウ】

注仲春者日月―正云從<sub>二</sub>奎五度<sub>一</sub>至<sub>二</sub>胃六度<sub>一</sub>在<sub>レ</sub>戌檢曰<sub>二</sub>降<sub>二</sub>降也

娄ハ斂也言物降落而收斂 而斗建卯之辰者斗星隨<sub>レ</sub>天而轉 一日

一夜過轉一周而行一度故正月建<sub>レ</sub>寅二月建<sub>レ</sub>卯也 弧在輿鬼―

正云熊氏說云石氏星經文弧與建星非二十八宿 而昏旦<sub>レ</sub>拳<sub>レ</sub>之者

曰「弧星近」井建星近「斗井有三十三度」斗有二十六度既寬若拳

井斗「不」知「何」日的「至」井斗之中「故拳」弧星建星「也然春分之時日夜

中計「春分昏中之星」去「日九十一度」今日在「奎五度」奎與「鬼之初」乃「

百九度所以不同者鄭雖「云」弧在「鬼南」其實仍當「井之分域」故皇

氏云從「奎第五度」為「二月節度」至「井第十五度」得「九十一度」是弧星當

井之十六度「也若從」井星十六度「至」斗之初「一百七十二度」計昏中星與「【42才】

明中之星「春秋分時相去分天之半應」一百八十二度餘但日入以後

二刻半始昏不盡「二刻半為明昏明相去少晝五刻一刻有三度

半強「五刻有十七度餘」則昏之中星去明之中星「一百六十五度餘則

建星不「得」在「斗初」在「斗十度」也此仲春之月昏弧中卜「八案尚書

云日中星鳥不同者如鄭康成之意南方七星檢為「鳥星井鬼則

鳥星之分故云星鳥與此同也「案仲夏昏亢中尚書云日永星

火不同者案鄭答孫顥云星火非謂「心星」也卯之三十度檢為「大

火其日大火之次有星者月令拳「其月初」尚書檢拳「一月故不同也

案仲秋之月昏牽牛中尚書云宵中星虛其仲冬之月云東壁中

尚書云日短星昴不同者亦是月令拳其初朔尚書檢拳一月【42ウ】

之中理亦不異孔安國注尚書與此則別尚書所拳星者自取

畢見之義「不」謂「南方之中」

其日甲乙一其日甲乙ト云ヨリ其音角ト云マテト其數〇ト云ヨリ祭先  
脾ト云マテトハ孟春ト同シトノ贊モナシ 律中夾鍾注ニ見タリ

注夾鍾者一正云夷則長五寸七百分之二十九分寸之四百五十一今上生ニ

夾鍾一當三分益一就夷則五寸之中取三寸一更益一寸一為四寸餘

有整二寸又於七百二十九分之中一有細分四百五十一此細分各三分

之是於二寸分為二千二百八十七分有四百五十一者為一千三百五十

三則是二千一百八十七分之二千三百五十五也以整二寸各二千

一百八十七分則二寸檢有四千三百七十四分益前一千三百五十三檢為【43才】

五千七百二十七為實數但上生者三分益一以實數一更三分之各有

一千九百九分以三分益一則益一分一千九百九併前五千七百二十七

檢為七千六百三十六為積分檢數也然後除之為寸一寸用二千二百

八十七則三寸檢用六千五百六十一以三寸益前四寸為七寸餘有二千

七十分不成寸是為夾鍾長七寸二千二百八十七分之二千七十五也

周語曰一四隙謂黃鍾大呂大簇夾鍾凡助二出四隙之微氣令滯伏

於下也 隙ハ次トヨム也夾ハ助也

始雨水一正云經中四事言之先後逐氣之早晚一故周書時訓驚蟄之

日桃始花又五日倉庚鳴又五日鷹化為鳩至秋則鳩化為鷹

始雨水トハ雨水ノ節トテ只今耕作スヘキ前ニ雨フル時分也 桃始華トハ文ニ【43ウ】

見タリ 倉庚鳴 倉庚ハヒハリトモ鶯トモ云ヘリ 正云積鳥云倉庚商庚

郭景純云即鶯黃也釋鳥又云鶯黃楚雀其氏云鶯黃一名倉庚又云

商庚李巡云一名楚雀方言云齊人謂之搏黍 鷹化為鳩トハ鷹

カ鳩ニ成ト云ハ薯ヤマノメ預カウナキニナルツレニ鷹カ鳩ニ変シタト云義ニハアラス

陽氣ニハ鷹カ鳥ヲモトラスメ拙鳥ニナツテ羽ヲホウソウトメ蒙々トメヲル

体ハ鳩ノヤウニナリタルト云義也鳩事正云積鳥云鳴鳩カケキク郭景純云

今之布穀也 謝氏之布穀者近之彼云布此云ハク搏者布搏声相近云々

或以為此鳥鳴布一種其穀 正云王制云秋鳩化為鷹然後設一罝羅

司裘注中秋鳩化為鷹小正云正月鷹化為鳩五月鳩化為鷹鄭無

所言則不信用也案通卦驗云倉庚為正月中與此不同者蓋是國土【44才】

各異氣有早晚云々

注漢始以雨一雨水敬驚蟄掘其早作在正月一若其晚在二月一

故漢初驚蟄為正月中雨水為二月節至在後以來事稍變改故

律曆志云雨水為正月中驚蟄為二月節由三氣有二參差一故也

天子居一孟春ト同青陽左个トイヘルヲ此ニ大廟ト云カヘタルハカリナリ青

陽大廟トハ東堂ノ一シ中ナリ

是月也安萌一萌牙トハ草木ノ地上ニヲへ出ルヲ云此ヲ蹈カラサスメソタツ

ヤウニスルヲ安ト云幼少ハヲサナウメ分別ナキ者也諸孤ハ父ナキミナシ子也

擇元日一元日トハ甲日ヲエラフヲ云民ニ云付テ社ノ祭ヲサセシム

注正云后土者謂<sub>二</sub>五官之后土<sub>一</sub>即社神也左傳僖十五年云君履<sub>二</sub>后土<sub>一</sub>【44ウ】

者別也但句龍為<sub>二</sub>配<sub>一</sub>社之人<sub>一</sub>又為<sub>二</sub>后土之官<sub>一</sub>也 祀社一正云郊特牲

云祀<sub>レ</sub>社日<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>甲<sub>一</sub>用<sub>二</sub>日<sub>一</sub>之始<sub>一</sub>也召誥戊午乃社<sub>二</sub>于新邑<sub>一</sub>用<sub>レ</sub>戊者周公

告<sub>二</sub>營洛邑位成<sub>一</sub>非<sub>二</sub>常祭<sub>一</sub>也

命<sub>有</sub>○令司省圜一命有司トハ有司ニ下知スルヲ云圜圜トハ獄舎ナリ省トハ獄

舎サスヘキ者ヲモ罪ヲ減メ杖罪ニ處スルヲ云正云蔡云圜ハ牢也圜ハ止也

所以<sub>レ</sub>止<sub>二</sub>出入<sub>一</sub>皆罪人所<sub>レ</sub>舎也崇精問曰獄ヲ周曰圜土殷曰麦里夏曰均臺

圜圜何代之獄焦氏答曰月令秦書則秦獄名也漢曰若盧魏曰司

空是也去桎桎在<sub>レ</sub>手曰桎在足曰桎手カセ足カセナリ頸カセヲ

入<sub>レ</sub>足ニホタシヲウツ類也カヤウノ事ヲモサセサルヲ去ト云正云易大畜

六四童牛之牯冷剛問曰牛四足何以称牯鄭答曰牛無手前足施牯也【45オ】

母肆掠肆ハ陳也人ヲ殺メ尸ヲ陳テ暴ヲ云サヤウノ事ヲモナシント云付也

正云周礼郷土縣土皆肆之三曰然春陽既動理無殺人何得<sub>二</sub>更有<sub>一</sub>死尸

而禁<sub>二</sub>其陳肆<sub>一</sub>者蓋是大逆不孝罪甚之徒容<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>春時殺<sub>一</sub>之殺則理

之故殺<sub>禁</sub>其陳肆一 止獄訟獄モ訟モウタヘ也人ノ訴訟ヲ止ヲ云

是月也玄鳥一玄鳥ハ燕也子ヲ生ンタメニ来ル此来ル日大牢ヲ以テ高

禘ノ神ヲマツル天子自身行幸ナル也日本ニハ天子ヲハ行幸ト云院ヲハ

御幸トモ行啓トモ云

注媒氏之官一人ノ媒スル者カ此時分兩方ノ可否ヲ酌テ云合スル也

高辛氏一正云殷本紀云簡狄行浴見三玄鳥墮三其卵一簡狄取吞之因孕

生レ契高辛氏ハ帝譽也城簡ハ簡狄也城ハ簡狄カ國ノ名也 大戴礼云【45ウ】

有城氏之女曰簡狄 後王以為媒官一後代ノ王コノ高辛ヲ立テ、

禊神トスル也日本ニムスフノ神トテ縁ニツケテト云事ヲ祈ル如クコノ高

辛ノ神ニ祈也 正云蔡邕以為禊神高辛已前旧有高者尊也謂「尊高」

之禊不下由三高辛氏一而始有中「高禊」又生民及玄鳥毛傳云姜嫄從レ帝

而三祠于郊禊一又云簡狄從帝而祠于郊禊一則是姜嫄簡狄之前先

有「禊神」矣云々參差不同者鄭志焦喬答王權云先契之時必自有三

媒氏祓除之祀一 在三於南郊一蓋以三玄鳥至之日一祀之矣然其禊祀乃於

上帝也城簡狄吞三子一之後々王為三媒官嘉祥一祀之以配レ帝謂三之高

禊一抛レ此言レ之則郊禊之祭契已前祭三「天南郊」以三先媒一配之故謂之郊

禊一至三高辛氏之時一既簡狄之異後王以是為三媒官之嘉祥一即以【46才】

高辛之君一立為三禊神一以配天其古昔先媒則廢之矣高辛氏

之後謂三之高禊一鄭義稷契當堯時案命曆序云帝譽傳十世

則稷契不レ得三為帝譽之子一是帝譽後世子孫之子故鄭注生民

云姜嫄高辛氏之世妃則簡狄亦高辛氏之後世之妃此立為禘

神者是簡狄之 不得為帝嚳 此祭高禘 是祭天故生民傳

云從於天而見于天高禘為配祭之人 祭天犧牲此用大牢者此

謂配祭之人也 變媒言一根本ハ媒ノ字也今示篇ニスルハ是

神明ニ告示ス義也 正云周礼媒氏職注媒之言謀也謀合異類

使和成者但不レ知初為媒者其人是誰一案世本及譙周●本伏犧制

以儷皮嫁娶之礼既用之配天其尊貴先媒當是伏犧也【46ウ】

后妃帥九嬪—后妃九嬪ヲツレテ此祭ニ侍リ從フ也

注天子ハ三夫人九嬪二十七世婦八十一女御アリ皆ツルレトモ中ノ九

嬪ヲ拳テ残ヲモツルハト知ラシムル也

乃礼天子—天子所御トハ群妃皆夜ノ御番ヲサセラル、程ニイツレモ

天子ノ御ニアツカレリ此所御ト云ハ皇子ヲハラミタルヲ云コレハ高媒ヲ

祭り果テ祝官カ天子ノ御トノエシテ孕メル人ヲ礼スル也ナニト礼スル

ソト云ニ高禘ノ神ノ前テ大祝カ酒ヲ酌テ所御ノ人ニノマムル也飲

ハテ、後ニコノ人ニ弓鞣ヲハシムルナリ弓鞣トハ弓袋也コノ懷妊ノ皇

子男子ナルヤウニト男ヲ求ル心也 授以—又弓矢ヲマイラセラル、也

コレモ男子ヲ求ル心ナリ于高—高禘ノ神前ニテカクスル也禘神ハ壇上【47オ】

ニアリ所御者ハ壇下ニアリ

注天子―漢書音義娠音身也 王居明堂―王居明堂ハ逸礼

篇ノ名也 其子―神ヲ祭トキハ必福ヲ降ニ故ニ其子天材ヲ得テ人

ニスクル、也天材ハ天然材能伎藝ナリ

是月也ニテヤ日夜―日夜ハ晝夜也晝夜ノ漏刻同シキ也時正ヲ云也晝五十

刻夜五十刻ヒトシアルヲ分ト云日出日入ヲ限トス一義ニ正云蔡邕以為星見為

レ夜日入後三刻日出前三刻皆属レ昼々有之五十六刻一之夜有之四十四刻一

鄭康成注尚書云日中星以為日見之漏五十五刻不見其漏四十五刻

與蔡校一刻也大略亦同 雷乃發声トハ雷ハ陽氣ノ声也陽氣ト

陰氣トヨセアハスル時ニ声ヲ發ス 正云蔡邕云季冬雷在ニ地下則【47ウ】

雉應而雉ト孟春動ニ於地之上一則蟄虫應而振出至レ此升仲春而動ニ於天之上一

其声發揚也以雷出有レ漸故言乃 始電トハ電ハ陽ノ光也陽カ微

ナルトキハ光ヲアラハサス此月陽氣漸ク盛ナリ故ニ其光アラハル、也

蟄虫咸動トハ地中ニ蟄スル虫カ地上ヘ出ントテ動クナリ啓戸始出トハ戸トハ穴

ヲ云中ノ穴ヨリ出也 正云蟄蟲日者孟春乃出則左傳啓蟄而郊是

也蟄蟲晚者則二月始出故此云蟄蟲咸動一則正月未皆動

先雷三日―雷ノナラントテ三日前ト云ハイツカ雷カナランスラン知ラレヌ様

ナルカ七十二候ノ内ニ雷乃發声ト云時分定レリ曆ナトニモ慥ニノセタリ

木鐸トハ木ニテ舌ヲシタル鈴也兆民ハ万民ノ心ナリ雷ノナラントテ三日前ニ

鈴ヲ振<sup>レ</sup>天下ノ者ニ教令メ告ク三日以後ニ雷ナルヘシ【48才】

有不戒一容止ハ動靜ト注ス夫婦交接ヲ云雷ノ鳴夜嫁メ設タラン子

ハ必カタワニアルヘシト也正義ニ支節性情必不備トシタルホトニ手足カナヘタ

ル歟平生本性情ヲ失テ病者タル歟或ハ盲目或ハ瘖タルヘシ必有凶

災トハ父母モ災アルヘシ仙道ナトニ●<sup>モ</sup>房内ノ事ヲツヨウ戒タリ狼性論

ニモコレヲ專イヘリ五月十六日ニ犯サハ三年ヲスコスヘカラストイヘリ

正云蔡云迅雷風烈孔子必變玉藻云迅雷甚雨則必變雖夜必

興衣服冠而坐所以畏天威也小人不畏天威懈慢褻瀆或至<sup>レ</sup>夫婦

交接一君子制法不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>指斥言<sup>一</sup>之

日夜分則同度量一度ハ丈尺也量ハマス也鈞ハ三十斤也衡ハ称ノ上ノ

サヲ也石ハ百二十斤也斗ハ八十升也角ハ斛也十斗ヲ斛トス榘ハハカリヲモシ【48ウ】

ナリ概ハ升カキト云モノ也晝夜同等ノ時ニ此等ノ器ヲ正メ平均ニ

スル也天下ノ器物カチトモチカワヌ様ニ人君トメ正ス也

注因晝一平ハ平均ニスル也京夷中トテカワラス國々ニアルヲ平均ニスル

ナリ丈尺曰度ト云ヨリ百二十斤曰石マテハ皆漢書律曆志ノ文也正云案

志文云黒柜一黍為一分十分為一寸十寸為一尺十尺為一丈<sup>字落歟</sup>○為一引云々

又云黄鍾之管長九寸圍九分其実一籥合籥為合十合為升十

升為斗十斗為斛云々又云黄鍾之管一籥<sup>イ</sup>容<sup>ル</sup>二千二百<sup>黍</sup>重十二<sup>銖</sup>二

十四銖為兩十六兩為斤三十斤為鈞百二十斤為石志又云權與物

鈞而生衡々運生規々圓生矩々方生繩々直生準云々

是月也耕者少舍一蟄虫ノ戸ヲ啓ク時分耕作ヲヤムル也土ヲホレハ虫ヲ【49才】

殺スホトニ此ヲ殺サシ為也 乃脩一闔扇ハ戸ヒラ也襄十八年左傳ニ

晋州綽以<sup>ムテヲ數ヤソウ</sup>枚<sup>トヒシラ</sup>闔ハ是齊ノ城門也此注ニアル如ク木ニテシタル戸

ヲ闔ト云竹葦ニテシタル戸ヲ扇ト云此ニハ耕者ト云故ニ庶人ノ事ヲ云

庶人ハ葦門蓬戸ノ体也故ニ竹ヤ葦ノアミ戸ヲスル也 寢廟畢備トハ

廟前曰廟後曰寢廟ハ是神ニ接ル処ナリ其処尊シ故ニ前ニアリ寢

ハ衣冠ヲ藏ル所也廟ニ對スレハ卑シ故ニ後ニアリ寢廟ノ修理スルヲ云

正云廟制有東西廂有序牆寢制唯室而已故積宮云室有<sup>二</sup>東西

廂一曰廟無<sup>二</sup>東西廂一有室曰寢是也

母作大事一軍兵ヲ起メ農事ヲ妨ヘカラス

是月也母竭川澤一川沢ノ魚ヲツクメ取ヘカラス陂池ノ魚ヲ尽メ取【49ウ】

ヘカラス山林ヲヤイテ獸ヲツクメ取ヘカラス此ニハ生物ヲ害スル事ヲ禁

制スル也 天子乃鮮一鮮ハ獻ノ字ニ作ヘシト云豳風七月詩ニ

四之日其祭獻羔祭韭ト云ホトニ此鮮ノ字ハ獻ノ字ナルヘシト也天子

ノ羔ヲ獻メ<sup>水神也</sup>司寒ノ神ヲ祭ル也開氷トハ氷室ニ藏メタル氷ヲ出メマツ

宗廟ニ薦ル也其後人ニ賦テ下サル、也

〔注〕献羔―左傳ニ献羔而啓之ト云啓時ニ祭ル 薦於宗廟―

宗廟ニ薦トハ仲春ヲ云乃後賦之トハ孟夏ヲ云故凌人云夏頒氷ト

云ヘリ春秋傳曰―正云案昭四年春大雨フレリ雷季武子問日啓ラハ可樂ト、メツ乎於申豊―

々々對以ニ此辭ニ北陸トハ虚ノ宿也十二月二日ノ虚ノ宿ニアル時氷ヲ

氷室ニ藏ル也西陸朝ニツトニ觀 出之―西陸トハ昴ノ宿也四月二日ノ昴ノ宿ニ【50才】

アル時ニ畢ノ星カ東方ニ見ユル也此時氷ヲ出テ頒テ百官ニ下

サル初テ出テ廟ニ薦ハ二月也百官ニ頒ハ四月也日本ニハ四月朔日ヨ

リメ九月卅日マテ毎日氷ヲ献スル也年中行事ニ四月朔日ノ処ニ主水

司始貢テタマツルヒヲ氷事トノセタリ 深山窮―深ハ閉也固陰ハ堅固ノ陰

ナリ<sub>ナリ</sub>深ハ閉寒テ陽ニ通セサル処ナリ是ニヲイテ氷ヲ取ル也

其出之也―朝之祿位トハ丈夫已上ヲ云賓トハ賓客ヲ云食トハ

常ノ飲食也喪トハ死喪ヲ云祭トハ祭祀ヲ云コレ等ニ皆氷ヲ用ル也

其藏之―黒牡ハ黒キ牲ヲ云和黍ハキヒ也コレニテ水神ヲ祭ル司

寒ハ水神也 桃弧―弧ハマル木ノ弓也弓ハアワセタル弓也桃ハ不祥ヲ

去クルモノ也鬼神ノヲツルモノ也故コレニテシタル弓ヲ桃弧ト云棘ハ【50ウ】

針アリテ惡ヲ禦ク故ニコレニテシタル矢ヲ棘矢ト云司寒ノ神トハ玄冥

ノ神也コレハ水神也 時食肉―献羔而―献羔ハ則黒牡也

火出而畢―尊卑ヲイワス悉ク賦リ與ル也火出トハ夏ノ三月也商ニ

於テハ四月也周ニ於テハ五月也周礼ニ夏頒氷ト云ハ建巳四月也夏ノ三月ト云ト四月ト云ト不同ナルコトハ 正曰建辰火星在昴火星始出至建巳火星漸高稔而言之亢得稱火出<sup>早</sup>則三月之未晚則四月之初不甚相遠又三月内有得四月節故拋夏而言之

案月令季冬藏氷詩幽風三之日納于凌陰三之日是建寅不

同者鄭注幽地ハ晩寒所以扶一月也 命婦トハ大夫以上ハ命セラ

ルホトニ大夫ノ妻ヲ命婦ト云 老疾トハ年ヨリテ歡樂氣トテ出【51オ】仕セヌ者也

上丁命一上丁トハ一月ノ内ニハ丁ノ日ニツアル歟三ツアル歟ナルヘシ其上ノ丁也樂正ハ樂官ノカシラ也釋菜ハ菜ヲ釋也蘋繁ノ類ニテ祭ヲ云

注命習舞一正曰樂春陽既動万物出地故王者習舞所以應之

夏小正 證習舞之意 正云稱王者何休注公羊云周武王以万

人一服天下 商頌万舞有奕蓋殷湯亦以万人得天下 此夏小正是

夏時之書亦云万者其義未聞或之為万以二万人以上 治水故樂亦稱万

天子乃帥三公一天子行幸アリテ習舞釋菜スルヲ見タマウ也

仲丁又命一公方祭ハ上丁也若衆ノ私ニ祭ハ仲丁也

注為一季春ニ合樂センタメニ預メ習ハス也正云上習舞釈菜【51ウ】

鄭不云為季春合樂則仲春合舞自當為之不為季春合

樂而習也熊氏以為仲春習舞為季春合樂者若然鄭何以

不言之又大胥無季春合樂何以亦云二春舍菜合舞熊氏說

非也 習樂者一歌トハ合声ヲ云八音トハ樂器響ヲ云

是月也祀不一季春ニ牝牡ヲ合センタメニ故ニ犧牲ヲ殺サス犧牲ノ代  
ニ圭璧ヲ用テ祭ル又皮弊ヲモ犧牲ノカエニ用ル也但小祀ニハ犧牲ヲ

用イス大祀ニハ用ル也故上ニ以大牢祠高禩ト云ヘリ

仲春行秋令一其國大水ハ地災也寒氣愴至ハ天災也

寇戎來征ハ人災也誤テ礼ヲ行時如此也

注畢又一正云元命包云畢七星十六度主二辺兵一【52オ】

行冬令一陽氣不勝ハ天災麥乃不熟ハ地災民多相掠ハ人災也

行夏令一國乃大旱煖氣早來ハ天災蟲螟為害ハ地災也

行令久ハ所人災之應ナリ故コ、二人災ヲイワス

季春之月日在胃一正云案三統曆云三月之節日在二胃七度一昏張二度

中去日一百七度且斗二十六度中清明日在昴八度一昏翼四度中去日

一百一十一度且女三度中 案元嘉曆三月節日在婁六度昏柳十二度

中且斗十四度中三月中日在胃九度一凡三十度日月行一會凡三十度

故三月日在胃七度 律曆志又云大梁初日在二胃七度一是也昏七星

中者案律曆志云胃十四度昴十一度畢十六度此角二度參九度并

三十三度鬼四度柳十五度七星七度從胃七度至七星之初有九十【52ウ】

九度以日漸長日没之時稍在西北去七星之初九十八度故昏時七星

在南方之中 且牽牛中者從七星之初一至牽牛之初一

注大梁ハ西方也

其日甲乙一是ハ孟春仲春季春ミナ同シ律中姑洗ト云文ハカリ替ル

十二月ニ配スルホトニ毎月カハラテハカナハサル也

注姑洗一正云南呂六二上生姑洗之九三南呂長五寸三分寸之一就

南呂三分益一取三寸益一寸為四寸餘有整二寸三分寸之一整

二寸者各九分之二九為十八分寸之一者為三分檢二十一分三七二

十一三分益一更益七分檢二十八分為一寸二十七分為三寸益前

四寸為七寸餘有一分在故云律長七寸九分寸之一 周語曰一此日【53オ】

ハ陽氣盛ニメ万物脩メ潔クスル也故ニコ、ヲ宗廟ニ用テ神ヲ致シ

竇ヲ納ル、也

桐始華田鼠一桐木ニ始テ花サク田鼠ハ田ニアル鼠也駕ハスカトリ也ウツラ駕ノ

タクヒナリ 正云反一歸旧形一謂之化易云乾道變化謂先有「旧形」漸々改者

謂之變 雖有「旧形」忽改者謂之化一 本無旧形非類ニメ而改亦謂之化故鄭

注周礼云能生「非類」レ化也

虹始見トハ虹ハ陰陽交會ノ氣ナリ

純陰純陽ニハ虹ハタ、ヌモノ也虹ニ雌雄アリ雄ヲ虹ト云雌ヲ蜺ト云雄トハ

明ニ盛ナルヲ云雌トハ闇ク微ナルヲ云 萍始生トハ萍カ水中ニ生ヲ云

注 鴛母一 生云尔雅釈天文某氏云謂鶻也李巡云鴛鶻一名年母

郭景純云鶻也青州呼鶻母 舍人云母作無今此注母無母當作牟ハ【53ウ】

謂牟無也 聲轉字誤牟字作母 萍萍也一正云尔雅釈草文

郭景純云水中浮萍也 江東謂之藻舍人云萍一名萍大者名蘋

天子居青陽一孟春ニハ青陽ノ左介ト云ハ明堂ノ東面ノ北ヨリ也

仲春ニハ青陽大廟ト云ハ明堂ノ東面ノマン中ヲ云コノ季春ニハ青

陽ノ右介ト云ハ明堂ノ東面ノ南ヨリ也春ハ東ナレハイツレモ東堂ニ居

レトモ春三月ノ中ニ又此三ツノ処カワレリ餘ノ文ハ孟仲季共ニ同シ

是月也天子一鞠衣ハ黄色ナル衣ナリ鞠塵ノ色ノ如シ故ニ鞠衣ト云桑

ノ葉カ初テ生スル時ハ黄ナリ蚕ヲ祈ルホトニ黄衣ヲ先帝ニマイラスル也

注為將蠶一正云依衣祭ニ五帝一自服大裘今薦鞠衣一與桑同色

蓋薦於神坐一鞠衣一正云菊者草名花色黄故季秋之月云三【54オ】

菊有黄華一 是鞠衣黄也與桑同色又當桑生之時一故云黄桑之

服也 先帝一正云言先不言上故知非天云々春時惟祭大皞

云々属者以蠶功既大非獨祭大皞故何胤云稔祭ニ五方之帝一具所

祭之處 賀湯熊氏等並以為在明堂以大皞祭在明堂故也

命舟牧覆一舟牧ハ舟ヲツカサトル官也覆舟トハ水ノ上ニテ舟ヲマツカ

イサマニナス也新ク舟ヲ作コトモ此月スル也新キ舟ヲモ久キ舟ヲモウラヘナシ面

ヘナスコトヲ五タヒツ、メ舟カタフク方舟ノ漏カヲミル也 乃告一舟ニキ

スナキ時舟カイツクモ成就スルト天子ニ申スモノ也

天子始乗一舟ノ備成テ天子ノ舟ニメサル、也 薦鮪一天子鮪ト云

魚ヲ取テ寝廟ニス、ム鮪カ時ノ美物テソアルラン注ニ進ニ時美物トアルニ【54ウ】

テ知ヘシ 正云案尔雅积魚云鮪鮪郭景純云似鱸而小建平人

呼ニ鮪子一本云王鮪似鱸口在頷下音義云大者為王鮪小者鮪鮪

長鼻體無鱗甲 乃為麥一麥ノ成熟スルヤウニト寝廟ニ祈ル也

注含秀トハ麥ノ初メ生メハラムヲ云

是月也生氣方一万物ノ生氣モ盛也陽氣發動メモレ出ソ

句者一地中ニ屈スル草木モ皆カシラヲサシイタス 萌一サキノトカリ

タル草木モ地ヲツキヌイテ出ル也達ハトヲストヨメリ 不可一時ノ氣ニ

順テ陰氣シタル教令ヲ行ハスメ陽氣ノ發出スルヤウナル教令ヲ行ヘシ陽

ハ内ヨリ外へ出ツ陽ヲ内ニト、コヲルヤウニスヘカラス

天子布德行惠一正曰穀藏曰倉米藏曰廩無財曰貧無親曰窮暫無【55オ】

曰乏不續曰絶皇氏云長無謂之貧窮暫無謂之乏絶

開府庫出幣一府庫ハ財宝ヲ入ルクラ也幣帛ハキヌ也周天下トハ事

足ラヌ者ニヲシナヘテ下サル、ヲ云一民モ其澤ヲカウフラスト云。勉一天

子ヨリ諸侯ヲス、メテ世ニ名アル士ヲ聘問シ德行アル賢者ヲ礼セシムル也  
正曰蔡氏云名士者謂其德行真純道術通明王者不得臣而隱居  
不在位者也賢者名士之次亦隱居也名士優故加束帛賢者礼之而已

是月也命司空一時雨ハ日本ニシクレトヨメトモ只ヨイ時分ノ雨也五日一風  
十日一雨ノ雨ヲ云天子ヨリ司空ニ命ノ當月ハ雨フルヘシ然ラハ下ヘクタ  
ル水モ上ヘアカルヘシ 循行一國ヲメクリ邑ヲメクリテ原野ノ平地ナ  
ル処ヲミ堤防ノツ、ミヲ修理スヘシ 道達一溝モミソ瀆モミソ也【55ウ】  
ソフサラヘテ水ヲトラスヘシ開通ノ溝ノ辺ニアル路ヲ開テウチフサクヘカラス

注廣平曰原ハ尔雅穡地ノ文也 古者一正曰周礼遂人職云

溝上有畝川上有路

田獵置罟一罟モ罟モアミ也コレハ獸ヲトルアミ也羅罔ハ鳥ヲトルア  
ミ也畢翳ハ兎ヲ打オホウテトルアミ也畢ハアミ小メ柄長シ天上ノ  
畢星ニ似タリ故畢ト云翳ハカクシト云物也射者ノ身ヲカクスモノ也  
餒獸ノ葉トハ獸ニ毒葉ヲアタヘテトル葉也魚ヲトル時毒流シスル類也  
此月ハ田獵ノ時ニアラス故ニカヤウノ物ヲハ九門ヨリ出スヘカラス  
正曰若路門内有者不得出路門應門内有者不得出應門筭此  
可知城門内有者不得出城門既不得出城門則近郊之内無所用【56オ】  
若近郊之内先有者不得出近郊之門近郊之門尚不得出雖

有亦不得用也。举此而言遠郊闕門亦可知。是此用之時所在之處。遠近皆不得用。故云。毋出九門。

注正曰。案爾雅云。蒐罟謂之罟。郭景純云。罟猶遮也。是罟為獸。

罟知罟亦獸。罟案。穢器云。罟謂之罟。々々覆車也。孫炎云。覆車ハ

是兩轅網。是兩轅。可以網鳥。非但網鳥。亦可以網獸。廣雅云。

細謂之罟。罟兔罟也。是獸罟曰罟。罟也。此罟與罟一也。鳥罟曰羅云々

此等之物。四時常有。於此季春之時。不得用耳。案周禮迹人云。

禁毒矢射者。乃謂四時也。天子九門。一正曰。自路門。皋門已內。

皆宮室所<sup>レ</sup>在。非<sup>ニ</sup>田獵之処。亦禁<sup>ニ</sup>羅網毒藥。不得出者。此等門內【56ウ】

雖是宮室所在。亦有林苑及空間之処。得有羅網及毒藥所施。

今月令。一正曰。今月令之本云。田獵罟羅網畢。弋與此經不同。

是月也。命野。一山ヲ掌ヲハ山。廣ト云。澤ヲ掌ヲハ沢。廣ト云。知メ野。廣ハ

野ヲ掌ル也。桑柘ヲナキリソト云。付ハ蠶ニクワセ。ンタメ也。柘口ヲモ蚕ガク

ヲウ歟。知ラス。鳴鳩拂。一鳩カ羽ツヨク成テ羽タ、キスル也。戴勝

ハレンシヤクト云。鳥也。天ヨリヲリテ桑ノ木ニトマル。是月ノ候也。

注。鳴鳩。一正曰。案。穢器云。鷓鴣音九物。反鷓音啣。

鷓鴣ハ似<sup>チウ</sup>ニ山鷓。一而小青黑色。短尾多聲。孫炎云。鷓鴣一名鳴鳩。

趨<sup>モリスコト</sup>レ農急也。トハ鳩ヲハ布穀トモ云。穀ヲ布ホトコセト云。心也。鳩カ鳴テ農ヲ

モヨフストミヘタリ 戴勝 正曰釈鳥云北及反及反鴟ウレヒケ鴞ウレヒケ戴ウレヒケ鴞ウレヒケ郭景純云ウレヒケ篤ウレヒケ【57オ】

即頭上勝今亦呼為戴勝タヲ戴ク也頭ノ上ニ戴ウレヒケレ毛故以為名也

具曲植チ一チ曲ハ竹ヲモテシタル器也コレニ蠶ヲ入ル、也植ハ曲ヲカケテヲク  
柱也籬ハ竹ニテシタル器也筐ハヨホウニシタル竹ノハコ也此等ヲソロヘテヲク  
ヲ具ト云也筐ハ圓也筐ハ方也

注 正曰方言云宋魏陳江淮之間謂之曲或謂之麴自レ関而西謂二

之薄エヒラ一方言注槌ハ縣二蠶薄ウレヒケ一柱也宋魏陳楚江淮之間謂之植チ自関而西謂之

槌齊謂之牂

后妃齊戒親一后妃モノイミメ自身桑ノ葉ヲコキテトル也東ウレヒケスルハ春

ハ東方ナルニヨテ也 禁一女房ハ平生ハ眉ツクリカ子ヲツケ身ヲ粧ウ

モノナレトモ今ハ蚕事ヲ本ニスルホトニケシヤウスル事ヲヤメラル、也省婦一【57ウ】  
婦人ノスル事ヲ省略メ蚕事ヲ本ニセヨト云也

注后妃一天子ノ后妃タニモ桑フトル徒ラニ井ン事ニアラスト思ハセテ

天下ヲス、メン為也 東郷一正曰若尋常養蚕或東西南北面

無所在今后唯東面採宗歟不審采明其不常留養蚕留痕者一正曰

祭義云下三宮之夫人世婦之告者使蠶是常留痕蚕也

祭義又云夫人副禱而受之言副禱則扱王后言三宮夫人則似扱

諸侯不同者祭義所レ云雜明天子諸侯之法副禱扱王后上公夫人モ

亦副禱也三宮夫人拋諸侯亦得通王之三夫人也 婦謂世婦

本文ニ婦女ト云ハ三夫人九嬪ニハアラス二十七世婦ハ十一女御ヲ云ル也

内宰職一正曰此經是季春躬桑内宰云仲春者以仲春既帥【58才】

命婦躬桑浴禱種敷至季春又更躬桑浴蚕也故熊氏云案馬質

注云蠶為龍精月直大火則浴其種是二月浴種也祭義云大昕之

朝奉種浴于川注云大昕季春朔日是三月又浴蚕也皇氏云

二月浴之三月乃躬其義非也 女外内一經ニ婦女ト云女ノ字

ヲ云 正曰外子女謂王外姓甥之女者内子女者王之同姓子女則

周礼之外宗内宗皆以嫁有爵者故内宰云帥外内命婦言内

命則未出嫁者不在焉鄭注周礼士妻亦為命婦則士妻亦

在 夏小正一正曰皇氏云妾謂外内命婦ニ子謂ニ外内子女

執ニ養宮事ニ執操也トハ長也謂ニ操持養長蚕宮之事

蠶事既一蚕事成就メ分繭トハ其マイヲ其人々々ニ分テ絲ニク【58ウ】

ラスルヲ云称アケテ糸效ナシム功トハ此糸ヲミラレヨ此ホトクリ出スト功ヲミスルヲ云

以共一郊祭ノ衣服ニ用ル也 無一懈怠セスメ絲綿ニセヨト也

是月也命一天子ヨリ工師ニ命メ百工ニ教令セシムル也百工ハ鍛冶

番匠ノ類也 五庫トハ金鉄入ル、庫一ツ皮革筋イル、庫一ツ

角繭イル、庫一ツ。羽箭齒幹入ル、庫一ツ 脂膠丹漆ノイル、庫一ツ

已上五庫ナリ量トハソレハ其ホトニスルト云旧法ヲ云筋ハ獸ノスチ也角ハツノ也齒羽ハ獸ノ齒羽也象牙ノ類也筋ハ矢幹ハ周礼ノ弓人職ニ幹

ト云ハ弓ノ事ニイヘトモコ、ハ器ニスル木ヲ云也脂ハアフラ膠ハニカワ丹漆ハ赤ウルシ此等ヲ法ノ如ク明ニメチトモソサウニスヘカラスト也

注工師―正曰周礼考工記ニ無<sup>ト去</sup>工師<sup>ト去</sup>知<sup>ト去</sup>是司空属官<sup>ト去</sup>者以<sup>ト去</sup>司空掌<sup>ト去</sup>【59オ】

工巧―此称工巧師長 輅<sup>レ</sup>幹―器ノ木ヲタムルニハ脂ヲヌル事アル歟

百工咸理 監工ハ前ニ云ル工師ヲ云百工ノシ出スモノヲ毎日檢知メミル

ホトニ監工ト云也號トハ號令スル也 母悖―器ヲ作ニ其時ノ氣節ニ依

テスヘシ時氣ニ逆テスヘカラスト時ニ逆テスレハ其器力堅ナラサル也

母或―淫巧トハ常ニカワリタルメツラシキ器也殷ノ紂カ玉盃象箸ヲ作ル

如キヲ淫巧ト云カヤウノ事ヲスレハ上タル人ノ奢ノ心テクルモノ也カヤウノ事ヲメ上ノ心ヲ動スヘカラスト

注弓人春―考工記弓人職ノ文也春液角トハ春ハ角ヲ水ニツケテ

和ニナス也夏治筋トハ筋ハ角ヨリモ柔也夏ノ暑氣ニヤワラク時コレヲ

ツカウ 秋合三材―三材トハ角筋木也弓ノ中ヲハ木ニテシ<sup>ソト</sup>外ノ方【59ウ】

ヲハ筋ニテシ内ノ方ヲハ角ニテスル也秋ハコレヲ膠漆糸ヲモテコシラユル

也冬定體トハ弓ノソリヒソリヲ久クヲイテカラメナヲスヲ云冬ハ氣力凝

テ堅キ程ニ氣ニシタカテ弓ヲカタムル也

是月之未擇吉日―合樂トハ笙ヒチリキ金大鼓鞀鼓ウツソロヘテ合奏スルヲ云

是月也乃合―累牛ハカサナル牛騰馬ハアカル馬也一乘一匹ノ牛馬ト云

心也厩ニカエル牛馬ヲ牧ニ放メ牡牛牡馬ニトツカシムル也

犠牲駒―駒ハコマ也犢ハウシコ也書其数トハナン匹トシルス秋ニ成テ

春放タルヲ内へ入ルトキ春出スヨリ少クナルカ又子ヲ生テ多ナルカ其数ヲ

知ランタメニシルスナリ【60オ】

命國難―國々郷々ニ命メヲニアライスル也陰氣ヲ追也九門ハ上ニア

リ磔ハハツ、ケトヨメリ攘ハハライ也牲ヲサラメ神ニハライメ春氣ヲ終ヘシム

注此難―陰氣右行―正曰天氣左轉故斗建左行謂ニ之陽氣

日月右行日月比スレバ天為陰故云陰氣右行―以此月之初日在於胃

此月之中從胃歷昴 有大陵―正曰元命包云大陵主レ尸

熊氏引石氏星經大陵八星在胃北主死喪 命方相氏―

方相氏ハ金吾也

季春行冬令―寒氣時發ハ天災也草木皆肅ハ地災也國有大

恐ハ人災也 注肅謂―正曰詩九月肅肅謂嚴肅

注水訛―正曰案孟春國時有恐注云以火訛相驚智是水者以【60ウ】

上孟春行夏令故為火訛此季春行冬令故云水訛雖初訛言相驚

水竟不至所以然者以冬氣來乘水欲來至以季春是土々能

制水故知不來

行夏令——民多疾疫ハ人災也時雨不降ハ天災也山稜不收ハ地災也

行秋令——天多沉陰淫雨蚤降ハ天災也兵革並起ハ人災也

注雨三日以上為霖隱公九年左傳文